九州における見世物興行の史的解明

―熊本の本妙寺「清正公遠忌」における見世物興行を中心に―

A Historical Elucidation on Street Performances in Kyushu: Street Performances in "The Anniversary of Ko Seisho's death" at Honmyoji Temple, Kumamoto

長堂　悠香
Haruka NAGADOU

崇城大学芸術学部美術学科芸術文化コース　平成29年度卒業生
Graduate of Arts & Culture Course, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：見世物興行、本妙寺、清正公遠忌、九州、熊本
Keywords: Street performances, Honmyoji Temple, The anniversary of Ko Seisho's death, Kyushu, Kumamoto

Summary

Research into street performances began in the Meiji period and currently researchers in diverse fields are making efforts to organize and delve further into this research including verifying and evaluating street performances from an artistic point of view. However, the targets of prior research have been urban areas such as Edo, Osaka and Nagoya and there has not yet been enough verification with respect to other areas. Therefore, the author decided to look at regional areas, focusing research on Kyushu, in particular the conducting of street performances in Kumamoto and their locations. In addition, focusing on Honmyoji Temple in Kumamoto, the family temple of Kiyomasa Kato, we attempted to clarify the specific contents of street performances held at the 13th anniversary of Ko Seisho's death at the same temple as much as possible with the following chapter structure from the contents of drawings, literature and prior research into the existing Honmyoji Temple Mountain View (1859).

First of all, Chapter 1 analyzes the various meanings of street performances according to prior research and, in addition to clearly indicating the scope of street performances as stated in this study, attempts to create a full picture of Japanese street performance culture, tracing as much as possible the origin and history of development of street performances in Japan. Next, in Chapter 2, we narrowed the target region down to Kyushu, gathered records on street performances from the Edo Period up to the Meiji Period during which street performances flourished and by organizing these into each province (Edo Period) and each prefecture (from the Meiji Period onwards), we discovered that performances that were popular in Edo and Osaka toured

around Kyushu and also that street performances in Kumamoto after the Higonokuni Period and the Meiji Period were conducted in temporary booths set up at temples, shrines or bridges and from the middle of the Meiji Period onwards, theatres were added as new locations for performances. In Chapter 3, after outlining the history of Honmyoji Temple, from the records of pictue and diverse literature, we elucidated as much as possible the reality of street performances conducted in the vicinity of the Honmyoji Temple grounds and its approach for the 250th anniversary of Ko Seisho's death (1859), the 275th anniversary (1885) and the 300th anniversary (1909) as well during the Meiji Period and we discovered that live puppet street performances enjoyed long term popularity in Kumamoto. The conclusion discussed the relationship between Honmyoji Temple and street performances and the reality of street performances in Kumamoto, a regional Japanese city and their characteristics.

はじめに

盛り場や祭り会場の一角で行われてきた見世物に関する研究は、明治期から始まり、現在においても美術史家を含むさまざまな分野の研究者が、その体系化や掘り下げに取り組んでいる。しかし、先行研究がこれまで研究対象としてきたのは、江戸や大阪、名古屋といった中心的都市であり、その他の地域については未だ十分な検証はなされていない。そこで本稿では地方都市に目を向け、調査対象を九州、とりわけ熊本に定め、熊本の中でも加藤清正の菩提寺である「本妙寺」に焦点を当てた。そして清正公250遠忌に出店された数多くの見世物小屋が描かれている梶山九江制作の《本妙寺山景図》(1859年)(図１)の描写内容や諸文献、先行研究等を基に、同寺の清正公遠忌で行われた見世物興行の具体的内容を、以下のような手順で可能な限り明らかにしてみたい。

まず１章では、先行研究による「見世物」の諸定義を分析し、本稿で述べる見世物の範囲を明示するとともに、日本における見世物興行の起源や展開、発展の歴史を跡付け、日本の見世物文化の全体像の把握を試みたい。続いて２章では、対象地域を九州に絞り、江戸時代から明治時代までの見世物興行の記録を収集して、それらを各国(江戸時代)や各県(明治以降)ごとに整理するとともに、特に肥後国時代と明治以降の熊本については、盛り場の変遷や当時人気のあった見世物興行についても言及する。次いで３章では、「本妙寺」の創立から現代に至るまでの寺史を概観した後、《本妙寺山景図》や諸文献の記録から、清正公250遠忌に寺域や参道周辺で行われた見世物興行の実態を明らかにしたい。また併せて、明治期に本妙寺で営まれた清正公の諸遠忌についても、見世物興行の実際とその変遷の様子を可能な限り明らかにしたい。

1　日本における見世物興行史

それではまず、日本における見世物興行について概観していくことにしよう。

1-1　見世物に関する先行研究

日本の見世物に関するまとまった記録は、小寺玉晁（1800～1878年）の全５巻の『見世物雑志』[1]が最初である。同書は、文政元（1818）年から天保13（1842）年７月までの25年間に及ぶ、名古屋における寄席・見世物の全興行を記録したもので、興行記録に加えて要所で芸の優劣に関する鋭い批評も行っており、第一級の芸能史料として知られる。次に、見世物を研究対象とした人物として挙げられるのは宮武外骨（1867～1955年）である。外骨は、江戸時代に行われた見世物興行の視覚資料、例えば浮世絵や引札などを収集し、それらを「見世物絵」と名付けて、自身が創刊した浮世絵雑誌『此花』（1901～1912年）に取り上げた[2]。『此花』は、明治45（1912）年７月に終刊したが、風俗研究家朝倉無声（1877～1927年）が誌名を継承し、新たに出版を行った。無声は、外骨版『此花』の常連寄稿者であったが、自身が引き継いだ『此花』でも見世物を中心に熱心な執筆活動を行った。無声は、見世物を初めて体系的にまとめた人物としても知られる。その名著『見世物研究』（1928年刊）では、彼が収集した見世物に関する膨大な資料を基に見世物が３つに分類されており、現代でも見世物研究の基礎資料として重要視されている。『見世物研究』が刊行された昭和初期には、他にも藤沢衛彦（1885～1967年）による『変態見世物史』（1927年刊）や松浦泉三郎（1905～1982年）の『好色見世物志』（1932年刊）などが出版された。また、風俗資料刊行会刊の『風俗資料』第３冊（1930年刊）では、「世界見世物研究考」と題した見世物に関する特集が組まれた。こうした出版物は、主に障害者見世物や珍動植物などを取り上げており、当時の退廃的な風潮を反映していた。その後も、加藤秀俊の『見世物からテレビへ』（1965年刊）や古河三樹（1901～1955年）の『見世物の歴史』（1970年刊）、小野武雄編の『見世物風俗図誌』（1975年刊）といった、見世物という言葉をタイトルに冠した書物の出版が続く。近年では、文化史家の川添裕が江戸の見世物文化を中心に研究・批評を行っており、『江戸の見世物』（2000年刊）や、無声の『見世物研究』の内容を補完した『見世物研究 姉妹編』（1992年刊）を刊行している。さらに同氏は、HP「RAKUGO.COM」（http://www.rakugo.com/）を開設し、同 HP において江戸時代を中心とした興行内容に関するデータベースや自身が収集した見世物絵を紹介している。また、建築史家の橋爪紳也は、その著書『明治の迷宮都市　東京・大阪の遊楽空間』（1991年刊）や『人生は博覧会　日本ランカイ屋列伝』（2001年刊）などで、都市・文化論的視点から見た見世物小屋について論じている。さらに社会学者の鵜飼正樹は、実際の見世物興行師に聞き取り調査を行い、見世物業界の実態に迫る研究を行った[3]。この他にも、『音と映像と文字による【大系】日本　歴史と芸能　第13巻　大道芸と見世物』（1991年刊行）や、『見世物小屋の文化誌』（1999年刊）といった見世物に関する研究書の出版が続き、さらに2016年には、国立民族学博物館において見世物をテーマにした「見世物大博覧会」（９／８～11／29）も開かれるなど、見世物への関

心は更なる高まりを見せている。

九州熊本における見世物興行に関する先行研究は、稿者が確認した限り、安田宗生の『近代熊本の劇場、活動写真、及び大衆芸能』(2007年刊）の１点である。そのため、ほかに具体的な調査をするには、興行当時の地方新聞が主要なソースとなる。熊本の新聞でいえば、現在マイクロフィルムで確認ができる、『熊本新聞』(明治９年５月～明治10年12月、明治12年６月～明治23年12月）や『紫溟新報』(明治15年６月～明治18年５月、明治19年１月、明治19年７月～明治19年12月、明治20年７月～明治21年12月)、『九州日日新聞』(明治21年10月～昭和17年３月）あたりが、当時の状況を知る貴重な資料であろう。そのほか、市が編纂した市史も重要な手掛かりを得られる史料として挙げられる。

1-2　文献に見る「見世物」の定義と本稿で扱う「見世物」の分類

「見世物」という用語は、日本で流行した大衆娯楽に対する呼称で、その興行自体は幕末から明治期にかけて隆盛を極めた。

見世物の条件としては、朝倉無声の「見世物年代記」(1912年）や藤沢衛彦の『変態見世物史』(1927年)、古河三樹の『見世物の歴史』(1970年）のいずれにも挙げられている事項から、①場所は寺社境内か盛り場、②臨時的な小屋の設置、③珍しい物や技芸を見せる興行、④観客からの金銭の徴収、の４点が導き出される。しかし、一口に「見世物」と言っても、その包含内容や意味は論者によって異なる。

そこで本稿では、見世物研究の第一人者朝倉が、『見世物研究』で具体的に挙げている内容を参考に、軽業や曲芸、奇鳥珍獣、籠細工、菊細工などを「見世物」とし、能楽や演劇、相撲といった諸芸能は「見世物」に含まないこととする。そして本稿が対象とする見世物の内容と分類は、Ⅰ「細工」もの：籠細工や貝細工、菊細工、からくり、人形、生人形、パノラマなどの人の手によって作られたもの、Ⅱ「曲技」もの：軽業や曲持、曲独楽、曲馬、曲鞠、奇術、力持、踊り、サーカスなどの身体を使った技芸を見せるもの、Ⅲ「動物」もの：異国から舶来した動物を見せたもののほか、犬や猿が芸を披露するもの、Ⅳ「人間」もの：身体に特徴のある人間が自分の身体を見せたものとする（表１参照)。

表１．見世物の分類

Ⅰ	細工	籠細工、貝細工、菊細工、からくり、人形、生人形、パノラマ等
Ⅱ	曲技	軽業、曲持、曲独楽、曲馬、曲鞠、奇術、力持、踊り、サーカス等
Ⅲ	動物	ヒクイドリ、山嵐、駱駝、虎、象、犬の曲芸等
Ⅳ	人間	長女、侏儒等

（典拠：朝倉無声『見世物研究』1977年、国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館資料目録【９】見世物関係資料コレクション目録』2010年）

1-3　見世物の起源と歴史

日本における見世物の起源は、古代中国の「雑技」とされる[4]。雑技は、宮廷の雅楽に対して、軽業や曲芸、奇術、幻術などの娯楽的要素の強い諸芸能を指す。雑技は、紀元前頃から中国で行われていたが、インドや西域などから芸能が持ち込まれると、徐々にその種類は増え、弄甌(ろうおう)[5]、呑剣、走

火[6]、縁竿[7]、鞦韆[8]、高絙[9]等のさまざまな芸能が行われた。それでは、日本には雑技はいつ頃伝わったのであろうか。

日本に雑技が伝わったのは、奈良時代頃である[10]。日本では雑技は、「散楽」と呼ばれ、宮廷の相撲節会や神楽のときに余興芸能として行われた。散楽は朝廷の保護下にあり、技術者たちは雅楽寮[11]の散楽戸に属した。後に、散楽戸制度が廃止されると、技術者たちは各地に分散し、散楽は寺社や街頭などでも自由に行われるようになった。こうして散楽の諸芸は庶民の間へと広まり、他の芸能と融合しながらそれぞれ発展を遂げていった。

平安時代には、散楽はなまって「猿楽」と呼ばれ、物まねなどの滑稽芸や寸劇に発展した。後に猿楽は、現在の能や狂言に発展するものと、曲芸や呪術などをはじめとする後に見世物と呼ばれるものになるものとに分かれていった。

続いて鎌倉時代には、勧進興行という形態が発生した。勧進興行は、寺社の造営や修復などのために浄財の寄付を求める興行のことである。この時代、勧進相撲や勧進田楽などが頻繁に行われ、次第に勧進を名目にした興行が増えていった。この勧進興行は、小屋掛けなどをして、金銭を受け取り興行する現在の見世物興行のスタイルに通じていた。

室町時代は、奈良時代以降各地に分散した地方の芸能集団による興行が京都や奈良で頻繁に行われ、中央と地方の商業的・文化的な交流が密接になった時代であった。例えば、永享４（1432）年10月には、西国から上洛したという女猿楽が洛南鳥羽で興行されるなどした[12]。次いで室町時代末期もしくは安土・桃山時代には、果心居士（生没年不詳）という幻術師が登場した。彼は、道服姿で如意棒を持ち、祇園祠前に立って樹下に地獄変相を掲げ、しきりに因果応報の理を説いて群衆を集めたという。これは、後の畸人の見世物の口上に見られる「親の因果が子に報い」式の因果応報的見世物に通じていた。

江戸時代には小屋掛けの見世物の展開が顕著になった。小屋掛けの見世物群が見られ始めるのは、慶長年間（1596～1615）から寛永年間（1624～1644）頃のことであった。寛永元（1624）年に江戸の中橋広小路（現在の京橋あたり）に歌舞伎劇場の中村座ができると、その付近に見世物小屋ができた。また、それまで通りで人を寄せていた辻芸（大道芸）が、小屋を掛けて見世物を興行するようになった。特に京都では四条河原が娯楽街として盛り上がり、見世物小屋が数多くできた。当時盛んに描かれた遊楽図屏風や絵巻などには、遊女歌舞伎の小屋や操り人形芝居とともに、見世物小屋の様子も描かれている。例えば《四条河原遊楽図屏風》には、遊女歌舞伎佐渡嶋座の周辺に５軒ほどの見世物小屋が描かれており、その内容は、ヤマアラシや犬を見せる動物見世物、大女、犬の曲芸、放下、風流笠の音曲となっている。また、山城国（京都）の見世物に関してまとめた『雍州府志』（1682～1686年）には、四条河原で興行された傀儡や蜘舞、幻術、連飛、輪脱、緒小桶、水操、珍禽奇獣、矮人、長女などが記されており[13]、見世物が盛んであったことが窺える。江戸時代には、以上の地域

の他、名古屋の大須観音や大阪の難波新地など、各地の盛り場が見世物で大いに栄えた。

続いて明治時代には、近世からあった見世物に加え、パノラマ館[14]や活動写真[15]、X 光線[16]など、近代化や西欧化の波に乗った見世物が興行された。また、蓄音器などの舶来機器や高層建築物なども、当時の人々には珍しい見世物であった。

その一方で、従来の見世物を厳しく規制する動きも見られた。新しく首都に定められた東京では、明治５（1872）年11月８日に、軽微な犯罪を取り締まる「違式詿違条例」が布達された。この条例では、男女相撲や蛇遣い[17]、夜十二時以降の歌舞音曲、路上の高声の歌などが禁止された。また、交通妨害の恐れがあるとして、明治６（1873）年には葦簀張（よしずばり）や床店（とこみせ）の大きさが定められた。さらに、明治24年10月３日には「観者場取締規則」が布達され、常設の見世物場の場所と興行内容までもが限定された。こうした取り締まりは、イギリス人記者に日本の見世物を痛烈批判した記事を書かれたためになされたものであった[18]。

2　九州及び熊本の見世物興行

本章では、地方都市の興行状況を把握するため、九州及び熊本の江戸時代から明治時代に行われた見世物興行について概略を述べたい。

2-1　九州の見世物興行

九州の見世物を体系的にまとめた文献は僅少である。そこで、日本全国で行われた見世物興行が年表形式で紹介されている Web サイトの「見世物興行年表」（http://blog.livedoor.jp/misemono/）内の検索バーでかつての旧国名（筑前国・筑後国・肥前国・肥後国・豊前国・豊後国・日向国・大隅国・薩摩国）の呼称と、現在の九州７県（福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県）の県名を入力してそれぞれ検索して、九州の見世物興行の記録を洗い出した。その結果、豊前国と大隅国、日向国・宮崎県を除く地域について見世物興行の記録を得ることができたが、地域ごとに興行の様子を明確にするため、「興行年」、「日付」、「興行地」、「興行内容」、「典拠」、「備考」の項目を設け、得られた情報を表（表2-1～表2-7）に整理し直した。

以下、作成した表をもとに、「筑前国・筑後国・福岡県」（表2-1）、「肥前国」（表2-2）、「佐賀県」（表2-3）、「長崎県」（表2-4）、「豊後国府内藩・大分県」（表2-5）、「薩摩国・鹿児島県」（表2-6）の順に、九州各県の主な見世物興行について概略を述べる。なお、熊本の見世物については次節で詳述するため、ここでは省略する。

①筑前国・筑後国・福岡県（表2-1）

文政９（1826）年とその翌年には、筑前と筑後両地域で虎の子（実際はツシマヤマネコ）が見世物にされた。

明治43（1910）年の第13回九州沖縄八県連合共進会では、西中洲及び肥前堀の埋立地など、およそ３万坪を会場に体育競技大会や巡回動物園などが開催され、60日間で90万人を集めた。博覧会が開かれた同年春には、福岡市の東公園にジオラマ館とパノラマ館が開館した。ジオラマ館の面積は、

幅約９m、奥行き約18 mで、その側壁三面には、幅約2.7 m、横約3.6 mの日本武将と元軍との戦闘場面を描いた《元寇大油絵》10面が展示された。隣接するパノラマ館は、東西約25 m、南北約22 m の大きさの楕円筒形で、壁面に縦約９m、横約75 m の《日本海海戦の図》が展示された。また、中央階段を上れば、旗艦三笠の甲板上にいるような錯覚を覚える臨場感あるつくりになっていた。しかし、パノラマ館は翌年10月からは《日本海戦の図》が《蒙古襲来の図》へと改作されたため、元寇パノラマ館と呼ばれた。《元寇大油絵》と《日本海海戦の図》は、パノラマ画家として有名な矢田一嘯（1859～1913）が描いたものであった。

②肥前国

表2-2参照。

③佐賀県

表2-3参照。

④長崎県（表2-4）

鎖国中、長崎はオランダ船が来航できる唯一の港であったため、異国の珍しい舶来物も、長崎を経由して日本にもたらされた。特に動物の舶来記録は数多く確認できる。最初に舶来が確認された動物は山嵐で、天明７（1787）年頃のことであった。

享和３（1803）年、アメリカより駱駝を載せた船がやってきたが、当時アメリカは日本の貿易禁止国であったため、船の上陸は叶わなかった。再び駱駝が長崎にやってきたのは、その18年後の文政４（1821）年頃であった。このときオランダから長崎に舶来した雌雄２頭のフタコブラクダは、九州をはじめ四国・大阪・京都・江戸など全国各地を巡業して人気を博した。

⑤豊後国府内藩・大分県（表2-5）

九州の見世物興行のなかで記録に登場するのが最も早かったのが、元禄３（1690）年に豊後国府内藩（大分県大分市）の浜之市で行われた見世物である。「浜之市」とは、柞原八幡宮（ゆすはらはちまんぐう）の放生会の際の御旅所（おたびしょ）[19]で毎年開かれた祭礼市である。浜之市では、200軒近くの出店があり、芝居小屋や見世物小屋も軒を連ね賑わったという[20]。浜之市の最初の見世物としては、布袋大からくり人形や竜馬琴之助の軽業（籠抜）、女の力持ちなどが記録され、その後も浜之市では大阪や江戸などからも芸人が見世物の興行に訪れていることがわかる。

⑥薩摩国・鹿児島県（表2-6）

安永元（1772）年、薩摩国にオランダ人によって山嵐が持ち込まれ、島津重豪（しげひで）（1745～1833）がこれを購入し、同年８月に田沼意次（1719～1788）に贈呈した。山嵐は後に将軍家にも上覧された。

また、明治15（1882）年には、江川万吉による軽業が松原神社で行われた。この江川万吉は、明治31年に福岡県久留米市、明治32年に長崎県長崎市で興行した江川万吉一座と関係していると考えられる。また、明治の浅草で人気だった江川作造を祖とする江川一座との関係も考えられるが、正確なことはわかっていない。

このように九州では、地域によって偏りがあるものの、多種多様な見世物が盛んに行われていたことが分かる。興行場所は、神社境内や祭礼市、寄場、劇場、空地、公園などであった。また、東京や大阪で人気のあった興行は、九州などにも巡回する傾向にあった。

2-2　熊本の見世物興行

次に、江戸から明治期にかけて肥後国・熊本県で行われた見世物について見ていく。熊本の場合も、前節と同様、Web サイトの「見世物興行年表」等から肥後国・熊本県の見世物興行記録を抽出し、前節の表と同じ項目で「肥後・熊本の興行記録」（表2-7）を作成した。その結果、江戸から明治期一杯までの見世物興行記録の数から、市内下河原がかつて盛り場であったと言ってよいことが分かった。また明治中期頃からは、諸劇場における見世物興行も確認されるようになった。そこで本節では、まず2-2-1項で①下河原と②劇場、それぞれの変遷の概略を述べたい。また、2-2-2項で熊本で興行された見世物の例を取り上げ、それらがどのようなものであったかを可能な限り明らかにしてみたい。

2-2-1　熊本における見世物興行場

①河原

下河原は、長六橋の下流の白川河川敷のことをいう。江戸時代、下河原は熊本の民衆娯楽の中心地であり、そこには上座・下座の２つの芝居小屋があった。江戸時代の下河原の興行としては、文化７（1810）年に操り人形芝居が記録されている。続いて天保12（1841）年に、小屋掛け芝居と同時に見世物興行も行われた。このとき、下河原は見物人で賑わい、これに便乗して本山の金毘羅宮でも出開帳が行われた[21]。しかし、下河原は盛り場である一方で、貧民の居住地でもあり、寛政８（1796）年からは刑場にもなった。文政11（1828）年には仮小屋住みの窮民が98人いたという[22]。

明治維新後も、熊本が都市化する一方で、下河原はスラム化した。熊本市は、地元の要望もあり、下河原のスラム化を改善するため、公園化計画を立て、工事は、明治31（1898）年８月に着工し、翌32（1899）年に竣工した。公園として整備された下河原公園には、庭園や興業地、運動場、貸地などが設けられた。開園して間もない頃、齊藤（ママ）喜三郎による「加藤清正霊験記」の生人形や石像十二変化の見世物（内容不詳）が興行され、また明治33（1900）年には園内の一角に温泉場も開設された。明治35（1902）年には江川藤吉一座の軽業、翌36年には公園内の劇場で山伏の力興行や菊人形の見世物興行が行われた。次いで明治41（1908）年には、安本亀八の生人形や機械仕掛けの象の見世物が行われた。以上のように下河原公園やその一帯は、娯楽の場として昭和初期まで多くの人で賑うが、昭和51（1976）年の白川改修に伴い、下河原公園は閉園した。

②劇場[23]

見世物興行が行われた劇場として確認できたのは、下河原の上座と下座（末広座）、招楽座、東雲座、共楽座、敷島座、喜楽座である。本節では、以下それぞれの劇場の変遷を辿ってみたい。

肥後藩では、熊本市内の劇場（芝居小屋）の建設を、下河原の「上座」と「下座」の２つに制限していた。また、興行期間も４月の１ヶ月間のみであったため、両座とも平屋建てであった。上座は、寛政・享和頃（1789～1804年）、下座は文化年間（1804～1818年）に建てられ、上座は士族階級、下座は庶民が見る芝居小屋とされて

いた。上座は西南戦争の戦火によって焼失したが、焼失前と同じ場所と本山河原の２ヶ所に仮小屋が設けられた。これら２座と戦火を逃れた下座の３座が競い合ったが、上座は仮小屋であったため下座に対抗できず、やがて廃止された。下座は、老朽化によって明治20（1887）年に川端町に移築後、「末広座」と改められ、さらに明治35（1902）年には旭座と改称された。明治43（1910）年には観客席の改修が行われ、大正13年に新市街に移転された。そして昭和20年に戦災で焼失するまで熊本市の代表的な劇場のひとつであり続けた。

浄行寺町では、古くから仮設興行がなされていたが、明治21（1888）年に「招楽座」が建てられた。招楽座の正確な閉場日は不明だが、明治28（1895）年６月７日の軍談興行を伝える記事（『九日』）には、「（中略）招楽座跡に於いて興行中なる」とあるため、その頃には既に閉場していたことがわかる。

次いで明治23（1890）年には、阿弥陀寺町に東雲座が建てられた。東雲座の席料は当時の相場からすれば高額で、桟敷１舛（４人詰）３円、出場１舛（２人詰）１円40銭、上場１舛（２人詰）１円20銭であった。また、日延べ興行期間中は、高桟敷が西２円20銭、中桟敷が西１円50銭、東１円20銭といったように、料金の引き下げがあったという[24]。

明治32（1899）年には、今度は、安巳橋に「共楽座」が建てられた。共楽座が建てられた安巳橋では以前から、芝居や相撲、浄瑠璃といったさまざまな興行が仮小屋を建ててなされていた。共楽座は明治35（1902）年に移転するが、移転後いつまで続いたかのは定かでない。また共楽座と同時期に、新鍛冶屋町に「敷島座」が開館した。敷島座は、明治44（1911）年に活動写真常設館「電気館」となった。電気館になる直前の43（1910）年の敷島座では、女義太夫や講談、浪花節が行われたが、同年７月22日の『九州実業新聞』には休場が報じられている。そして10月30日の浪花節興行を最後に閉場し、電気館への改修工事が行われたとみられる。明治39（1906）年には、下河原公園内に喜楽座が建てられたが、喜楽座における興行は明治35（1902）年以降から行われているため、明治39年完成の建設作業は改装工事であったと考えられる。

2-2-2　見世物興行の例

次に熊本で行われた見世物興行の具体例を見ていく。

①生人形

生人形とは、一見人間と区別がつかない精巧な人形のことである。冨森盛一の『生人形師　安本亀八』は、嘉永５（1852）年２月の大阪の大江忠兵衛の「今様人形大豊年十二賑」と題する張子細工人形を生人形の嚆矢としている[25]。江戸に生人形の評判が伝播すると、他の細工人も作るようになり、生人形は人気の見世物になった。中でも、生人形興行で名声を博したのが、熊本出身の松本喜三郎（1825～1891）や安本亀八（1826～1900）であった。

喜三郎は、嘉永７（1854）年に熊本から上阪し、難波新地において「鎮西八郎嶋廻り」を主題とした異国人物の生人形興行で、生人形師として華々しいデビューを飾った。

喜三郎の熊本における生人形興行は、明治15（1882）年に下河原で行った「西国三十三所観世音霊験記」が最初である。その後は、翌16（1883）年に下河原、18（1885）年に本妙寺と新町で興行し、さらに明治25（1892）年にも末広座で興行を行った。さらに、喜三郎の没後にも、31（1898）年に下河原で二度、42（1909）年に本妙寺で追善興行として一度、弟子の江島によって興行が行われた。

亀八と喜三郎は、地元の地蔵祭りで作り物の出し合いをして互いの技を競い合う仲であった。亀八の熊本興行は、安政６（1859）年の本妙寺における興行が最初であった。その後しばらくは興行はなされず、明治30（1897）年になって再び下河原で興行が実施された。次いで、明治33（1900）年と明治41（1908）年にも下河原公園内で興行が行われている。しかし、初代亀八は、明治32（1899）年に没しているため、明治32年と明治41年の興行は３代目亀八（1868～1946）作の生人形興行であったと考えられる。亀八や喜三郎以外の細工人による生人形興行も盛んで、明治30年代以降の活動写真の隆盛にもかかわらず生人形の興行は度々行われていた。

②パノラマ

パノラマとは、円筒形、または多角形の建物内部の壁面に写実的な風景の絵画や人形等を設置し、中央の観覧台からそれを眺める見世物のことである。イギリスの画家ロバート・バーカーが発明して1794年に興行化、18世紀末から19世紀前半にかけてヨーロッパ各地で流行した。

日本初のパノラマ館は、明治23（1890）年５月７日に第３回内国勧業博覧会の際、上野公園に建設された「上野パノラマ館」であった。画題は戊辰戦争の《奥州白川大戦争図》で、矢田虎吉（一嘯）が描いたものであった。同年５月22日には、「日本パノラマ館」が開館し、２人のフランス人画家が描いたアメリカの南北戦争図が設置された。翌24（1891）年１月９日には大阪難波、同年３月27日には東京神田錦町、７月９日には京都新京極といったように、その後も全国各地でパノラマ館が開館した。日本のパノラマの題材は専ら戦争であり、国民の戦意高揚が図られた。

熊本のパノラマ館としては、明治27（1894）年に熊本市下追廻田畑町（呉服町）に開館した「九州パノラマ館」があった。当時の新聞記事は、建物は明治27年２月上旬頃完成、その後内装やパノラマ画の設置を行い、４月22日に開場したと伝えている[26]。入場料は大人５銭、軍人・学生・小児は３銭であった。同館に設置されたパノラマ画は、西南戦争の田原坂・段山・日奈久の戦闘場面を描いたものであった。作者は上野パノラマ館と同じ矢田虎吉（一嘯）とその弟子の笠木次郎吉であった。館内は、パノラマ画に加えて「光線」や「実物」なども配され、臨場感のあるものであった[27]。また、６月５日には九州パノラマ館付属肖像館が開館し、有栖川宮や西郷、桐野、別府、池辺など西南戦争の主要人物の肖像画が陳列された。ところが、開館の年の７月に日清戦争が勃発したため、同年12月には、急遽九州パノラマ館の隣にジオラマ館が増築され、新たに日清戦争図７枚が設置された[28]。この日清戦争図には、矢

田と熊本の画家上田丹崖（1863～？）、光永眠雷（1867～1928）が制作に携わった。その後、西南戦争図は明治29（1896）年２月10日に撤去され、同年５月からは、京都の洋画家田村宗立（1846～1918）による日清戦争図が公開された[29]。日清戦争図には、戦死者百余名の肖像や威海衛の戦闘場面が仔細に描かれていた。九州パノラマ館の正確な閉館日は不明だが、明治31（1898）年７月10日の新聞広告に「パノラマ館解除に付板材ガラス土台石綿」を全て売却するとあり、その頃に閉館したと思われる。また、明治38（1905）年６月14日には新市街に日露戦争の旅順口攻撃を題材にしたパノラマ館が開館したが、同館がその後どうなったかは不明である。

日本のパノラマの流行は、日露戦争の終結や、後述する「活動写真」の登場とともに終息した。

③活動写真

活動写真は、明治から昭和初期までの映画の呼称である。日本の活動写真の歴史は、神戸の高橋信司が輸入した「キネトスコープ」に始まる。これは、個人が箱の外側より覗いて内部の動画を見るというもので、当時は「写真活動機」や「写真活動眼鏡」、「写真人物活動機」と呼ばれた。明治29（1898）年11月19、21日付の『神戸又新日報』は、神戸滞在中の小松宮親王、有栖川宮大妃の「キネトスコープ」観覧について報じている。その後25日から神戸倶楽部において一般に公開され、東京や大阪でも興行された。次に、フランスのリュミエール兄弟が発明した「シネマトグラフ[30]」が、京都の稲畑勝太郎によって日本に輸入され、明治30年２月15日より大阪南地演舞場で初興行された。興行時の新聞記事には「自動写真」や「自動幻画」と書かれた[31]。同じころ、東京の新居商会が「ヴァイタスコープ[32]」を輸入し、歌舞伎座や神田錦輝館において興行した。また、「ヴァイタスコープ」の興行記事や広告には「活動大写真」や「活動写真」の文字が見られ、「活動写真」の呼称はこの頃定着したものであることがわかる[33]。

熊本における初めての活動写真上映は、明治30（1897）年９月19日のことで、東雲座においてであった[34]。日本では、同年２月からシネマトグラフの興行が始まったため、その巡回興行で熊本に来たものと考えられる[35]。その翌年は末広座において、玉川花遊一座[36]が幻灯や奇術に加え活動写真の興行を行った。しかし、熊本における活動写真の普及は明治30年代後半からのことであった。当時の活動写真は無声であったため、活動弁士と呼ばれる解説者がいた。また、上映時や幕間に洋楽や邦楽の生演奏や踊り、複数の役者による陰科白（吹替）なども行われた。ちなみに熊本における活動弁士は４～５名いたことが確認されている[37]。明治44（1911）年には、熊本初の活動写真常設館である「電気館[38]」が現在のシャワー通りに創設された。現在新市街にある電気館は、大正３（1914）年に移転・開館したもので、日本国内に現存する電気館３館のうちの１館である[39]。

2-3　２章のまとめ

以上、見世物興行場といった視点から、江戸・明治期の熊本における見世物興行事

情を見てきた。江戸から明治30年代までは、常設の劇場でなく河原や寺社地などで仮設小屋を建てて、見世物が興行されており、本章で取り上げた下河原の他、明十橋や安巳橋、浄行寺でも仮設小屋で興行が盛んに行われていたのがわかっている。明治30年代以降は、活動写真が娯楽の中心になったため、劇場では演劇興行以外に活動写真の興行も行われ、上映設備を整えるための改装工事などが行われた。その一方で、それまで人気を博していたパノラマなどの見世物は衰退していくことになった。しかし、生人形の興行は江戸後期から明治40年代まで行われており、持続した人気を誇っていた。

3　本妙寺の見世物興行

本章では、熊本市内の古刹本妙寺における見世物興行の内容について述べる。本妙寺では、清正公信仰の祭礼である「清正公遠忌」が過去に幾度か営まれ、その度に多くの参詣人で賑った。清正公遠忌における見世物興行記録の初出は、安政６（1859）年の清正公250年遠忌である。その清正公250遠忌の見世物興行の様子を、南画家の梶山九江が《本妙寺山景図》（図１）に詳細に描いているため、本章では、同図に描かれた内容や諸文献をもとに、清正公250年遠忌の見世物興行について考察していく。また、明治期の清正公遠忌における見世物興行についても調査結果を示し、本妙寺の祭礼における江戸から明治期までの見世物興行の変遷を概観したい。

3-1　本妙寺の歴史と寺域

加藤家の菩提寺である本妙寺は、「清正公信仰」を支える寺社の一つで、いまなお参拝者が絶えない。創建は天正13（1585）年で、清正（1562～1611年）が父清忠の菩提を弔うため、摂津（大阪府）に開山し、当時は瑞龍院といった。続いて天正16（1588）年、肥後藩の北半分の領主となった清正は、天正19（1591）年の熊本入城と同時に寺院を旧熊本城内に移転するとともに、寺院名も本妙寺と改めた。

慶長16（1611）年、旧暦６月24日に熊本城内で卒去した清正は、遺言により中尾山に埋葬された。慶長19（1614）年に旧熊本城内の本妙寺が焼失すると、元和２（1616）年に現在の場所に移設され、加藤家の菩提寺となった。寛永９（1632）年には、加藤家の改易と細川忠利（1586～1641）の肥後入国により、清正公を菩提とする本妙寺は存続の危機に直面するが、細川家はこれを庇護した。慶応４（1868）年には、「神仏分離令」により、清正の祭祀は神祭に改められ、仏式の廟や拝殿が破却された。続いて明治10（1877）年には、西南戦争の戦火で大本堂を失うなど、本妙寺は苦難の時代を迎えたが、浄池廟は明治27（1894）年、大本堂は明治30（1897）年に再建され、現在に至る。

次に、まず現在の本妙寺の外観や寺域から見ていけば、寺域は、大正９（1920）年建立の鉄筋コンクリート造の仁王門（図２）から、昭和10（1935）年の清正公325遠忌を記念して制作された「加藤清正公銅像」（図３）のある本妙寺公園に及ぶ。参道沿いには、12の子院や大本堂が建ってい

る。大本堂から先には、中央に信者から寄進された多数の石灯籠が並ぶ胸突雁木（図２）と呼ばれる176段の急勾配の石段がある。胸突雁木を登ると清正の御霊が眠る浄池廟があり、手前には宿屋と茶店が１軒ずつ立っている。また、市電本妙寺電停から本妙寺へと続く道の途中には井芹川が流れ、寺院の周辺には現在病院や公民館、商店、住宅などが立っている。

江戸時代頃の本妙寺を知る手掛かりとなる資料としては、細川忠利入国直後の本妙寺境内の山林の様子を描いた寛永９（1632）年制作の《本妙寺領山絵図》がある（図４）。同図には、中尾山一帯と本妙寺周辺の町村の図が描かれており、裏には忠利の自筆で本妙寺寺領を定めた覚え書きが書かれている。それによると忠利は、本妙寺に、中尾村（現、花園）と下中尾村、西浦村、小塚村、井芹村（一部）の５村300石の寺領と100石の住職隠居料を寄進した。寄進された５村一帯の本妙寺による所有は、少なくとも石高制が廃止される明治の地租改正頃まで続いたと考えられる[40]。

また、明治期の本妙寺の様子は、明治38（1905）年に出版された銅版画の「肥後熊本本妙寺真景全図」から窺うことができる（図５）。この頃は、境内入口の仁王門は、まだ木造の「黒門」であった。さらに銅板画には、大本堂隣の現在の本院に当たる場所に宝物館の建物が見られるが、現在は浄池廟がある敷地内に移されている。

3-2　清正公250遠忌の見世物興行

《本妙寺山景図》の画面右下の井芹川に架かる橋のたもと付近を見てみると、幾軒かの茶店や酒店が設けられ、その間に菓子屋や書画店が描かれているのがわかる。それらに連なり、「投扇場[41]」や「猿芝居」、「生人形」、「座頭角力」、「人形芝居」、「ミセ物」（見世物）の小屋が並んでいる。本妙寺境内にさしかかる坂道にも、「水カラクリ」の小屋や宿屋があり、山門前には酒店や「芝居」、「カルハサ（軽業）」の小屋がある。さらに、山門を入ると参道沿いには、「京カラクリ」や「カルハサ」（軽業）、「チンコ芝居」、「生人形」、「猿芝居」、「ハラミ人形」（孕み人形）、「曲独楽」、「人形芝居」、「曲馬」、といった小屋が並んでいる。大本堂の西側には「千両芝居」の小屋や酒店が設けられている。見世物小屋の描写は、胸突雁木から上には見られないため、見世物興行は井芹川付近から参道を中心に行われたことがわかる（図６、７）。画中で確認される見世物小屋の数は、全部で23軒である。それらのうち、「生人形」や「猿芝居」、「人形芝居」、「水カラクリ」の小屋はそれぞれ２軒あり、「カルハサ」のそれは３軒ある。「座頭角力」や「芝居」、「京カラクリ」、「チンコ芝居」、「ハラミ人形」、「曲独楽」、「曲馬」、「千両芝居」の小屋は１軒ずつで、「内容不詳の見世物小屋」は４軒である[42]。《本妙寺山景図》からは、見世物小屋の位置や数、種類は、以上のように識別された。しかし、これらの小屋における具体的な興行内容については、九江の作品からは情報を得ることはできない。そこで次に、清正公250年遠忌に関する先行研究を頼りに、見世物の内容を可能な限り明らかにしていきたい。

熊本藩郡代の中村恕斎は、清正公250遠

忌に出掛けたことを日記（『恕斎日録』）に記している。同日記によると、法要は２月18日から29日まで営まれ、開帳は２月20日から始まった。見世物興行は開帳と同時に２月20日から始まり、３月29日まで行われた。恕斎は、２月23日に浄池廟を参拝し、開帳を見物した。また、３月９日にも再び本妙寺に出掛け、この時には、「生人形」や「足芸」、「曲馬」、「猿の踊り」、「歌舞伎」、「操り人形」といった見世物を見物した[43]。これらの興行物を《本妙寺山景図》の描写内容と照合すると、「歌舞伎」は「千両芝居」、「猿の踊り」は「猿芝居」、「操り人形」は「人形芝居」に当てはまる。「足芸」の小屋は《本妙寺山景図》中にはないため、「内容不詳の見世物小屋」４軒のうちの１軒で行われたものと考えられる。恕斎はまた、生人形の見世物に関して詳しく述べているが、後述するので、ここでは黒門（山門）外の生人形は迎町、黒門（山門）内の生人形が新町から出されたものであったということを確認するに留める。

続いて岡崎鴻吉が昭和27（1952）年に出版した『熊本御城下の町人』の「安政頃の見世物」の項にある、清正公250遠忌の見世物の記述を見てみよう。それによると、見世物興行に関しては、境内には「大芝居」や「あやつり」（阿州坐元中村久太夫）、「駒内」（江戸住竹沢万次）、「綱渡り」、「ラングイ渡り」、「チンコ（小供）芝居」、「作り物人形」、「竹田カラクリ」、「楊弓」といった興行物があった。さらに黒門（山門）外には、「大芝居」、「足曲」、「水カラクリ」、「横手五郎出開帳[44]」、「坐頭角力」（此内百済木棒踊り白太鼓）、「牛娘」、「天草鬼池座あやつり」、「大人形四十八癖」（迎町細工人亀八）、「猿芝居」、「投扇曲」、「蒸汽船」といった興行物が軒を並べたことが分かる[45]。

以上の先行研究からは、さらに、境内では、人形芝居小屋で行われた操り人形が阿州（阿波国）の中村久太夫によっていたことや、軽業の小屋では綱渡りやラングイ（乱杭）渡りが興行されたこと、また曲独楽の小屋では竹沢万次による駒内（曲独楽）が行われたことがわかった。また、からくりの小屋では竹田というからくり師が興行したことや、《本妙寺山景図》には描かれていない楊弓が行われていたこともわかった。さらに、黒門外の興行物では、「座頭角力」の興行と併せて百済木の棒踊りも興行されたことや天草鬼池座による操り人形芝居が興行されたことがわかる。そして、《本妙寺山景図》では内容不詳だった４軒の見世物小屋では、黒門外の興行物に関する記述から、「足芸」と「牛娘」、「蒸汽船」といった見世物が興行されていたことが推察される。

これらを踏まえて、250遠忌の見世物興行を、1-1節で提示した見世物の分類（表１参照）と、興行した場所（「参道」・「山門外」）に応じて分け、表に整理すれば表３のようになる[46]。そして同表によれば、清正公250遠忌の見世物小屋数は、「曲技」が最も多く、「細工」がそれに続き、「動物」と「人間」はそれらに比べて圧倒的に数が少ないことがわかる。また「曲技」の中では、芝居類の小屋が目立ち、芝居興行が盛んであったことがわかる。

表３．清正公250遠忌の見世物の分類

	参道	山門外	計（小屋数）	小計
細工	生人形（1）	生人形（1）	2	7
	京からくり（1）		1	
	孕み人形（1）		1	
		水からくり（2）	2	
		蒸汽船（1）	1	
曲技	軽業（2）	軽業（1）	3	12
	人形芝居（1）	人形芝居（1）	2	
	ちんこ芝居（1）		1	
	曲独楽（1）		1	
	曲馬（1）		1	
	千両芝居（1）		1	
		座頭角力（1）	1	
		芝居（1）	1	
		足芸（1）	1	
動物	猿芝居（1）	猿芝居（1）	2	2
人間		牛娘（1）	1	1
計	11	11	22	

3-3　明治期の清正公遠忌における見世物興行

3-3-1　275遠忌

清正公250遠忌に続くのは、25年後の明治18（1885）年の275遠忌である。遠忌や見世物興行に関しては、『紫溟新報』の明治18年４月３日と、『熊本新聞』の明治18年４月15、18～24日、5月20日の記事に確認できた。新聞から判明した興行物は、象、生人形、操人形、機械人形、足藝、蒸氣車、身振新内である。

４月19日掲載の見世物に供された象について記した記事によれば、象は、高さ一丈（約３m）、前後五幅（約１m 89.5 cm）、両脇十幅（３m 79 cm）の紅白木綿の布を蚊帳のようにしたものに覆われ、数十人の若者や中年男性に付き添われて、山鹿から本妙寺まで連れてこられたことがわかる。行列の左右には象の形を染め付けた大旗が立ち、太鼓を鳴らす者と鳶口（木材移動の道具）を持つ者、２名が並列した。また、付き添った数人の男性陣が来ていた半纏の背中には「大象」の文字が染められていた。また翌20日の新聞上では、この象は、10年前にも坪井町の永願寺境内で見世物にされていたようで、大きく成長した象は、本妙寺までの道中、その鳴き声で周囲の馬や住民を大変驚かせたため迷惑がられたという。しかしこの話は、この後の23日の記事で根拠のない噂話とされ、逆に人々に人気であったと書かれている。また、19日の記事では、象の見世物は20日に始まると記されていたが、23日の記事は、22日に始まり、同時に「孕み婦人」や「清正公御一代記」などの生人形の興行もなされたと伝えた。また、同記事には「清正公御一代記」の作者の名前は記されていないが、『紫溟新報』の明治18年４月３日の記事に「今度本妙寺の開帳に清正公一代記の人形を製作する松本喜三郎は…」とあることから、喜三郎によるものであったことは疑いない。しかし、内容は不明である。さらに、喜三郎はこの「清正公御一代記」以外にも、遠忌中に明十橋において「本朝孝子伝」29場面を公開していた。「本朝孝子伝」とは、日本各地の孝子や孝女の事例を29場面76体で表現した喜三郎最後の作品である。喜三郎は、遠忌初日に間に合わせようとしたが間に合わず、完成は遠忌に食い込んだ。しかし、完成はしても本妙寺には興行場がなく、結局明十橋の堤防沿いで興行したという[47]。

3-3-2　300遠忌

次の遠忌は、明治42（1909）年の３月12日から４月30日まで営まれた清正公300年遠忌である。明治10（1877）年に焼失した大本堂も既に再建され、本妙寺は衰退から完全に立ち直り、300遠忌は「本妙寺の復興の記念碑的行事」[48]であった。『九州日日新聞』（以下『九日』と略す）では、連日、本妙寺や錦山神社における300遠忌の様子が特集で報じられ、祭礼が市中を賑わせた大きな行事であったことがわかる。『九日』に掲載された同遠忌に関する記事を洗い出し、興行物の内容を整理し、「見世物の分類」（表１）に分けると、「曲技」類が「曲芸」、「曲馬」、「武士踊」、「龍宮踊」、「朝鮮の舞姫踊」、「流宮星大玉持ちや約大芸」、「岩戸神楽」、「梅の助一座の芝居」、「12種の奇術」、「四町分座の操人形」、「女剣舞」、「支那人の槍投げ」の12種、「細工」類が「熊本城の模型」、「生人形」、「活動写真」、「海人の水芸」、「木馬乗り」、「観戦鉄道」、「船滑り」、「鉄線すべり」、「海事工作館」、「自転車練習機械」の10種、続いて「動物」類が「矢野動物園」、「胎中の鯨」、「牛の胎児」、「胎児の火酒漬」、「二本指の子ども」、「白子」、「人面犬手の犬の子」、「小人島の芸づくし」の８種あったことが判明した。また記事の一部には、興行の内容や小屋の出店状況などを記すだけでなく、視覚資料（写真や挿絵）を添えたものもあった。添えられた写真は、山鹿燈籠の「熊本城模型」（図８）と松本喜三郎の生人形「本朝孝子伝」（図９）、「鉄線滑り」（図10）、「海事工作館」（図12）の４点、挿絵は「観戦鉄道」（図11）の１点である。ここでは、視覚資料が確認されたもののみ各見世物の様子に言及しておく。

まず「熊本城模型」（図８）については、大きさが「七間四面」、縮尺が「現城百分の十八」であり、12名の職人が３年かけて制作したものであった。次に喜三郎の「本朝孝子伝」（図９）の写真であるが、29場面のうちの一場面を切り取ったものと思われるものの、写真が不鮮明で詳細を明らかにできない。しかし、喜三郎は明治24（1891）年に没しているため、同興行が喜三郎に奉納されたものであったことは疑いない。喜三郎の作品は、この他、弟子の江島栄次郎が師匠追善のために興行した喜三郎の「西国三十三所観世音霊験記」の生人形[49]も興行された。生人形については、さらに作者不詳の「清正公一代記」も興行されたことがわかる。続いて「鉄線滑り」（図10）は、ワイヤーにぶらさがって滑走する興行物で、その距離は「鉄道踏切より井芹川を越え京町畷に至」り、30間（約60ｍ）であったとされる。同興行は、小早川三蔵と山本孫六両氏が「コーハーヤーマー博士」と称して興行していたもので、写真には着物姿の女性や男性が「鉄線滑り」で遊ぶ場面が写されている。「観戦鉄道」は、鉄道を模した乗物からパノラマを見る趣の興行物で、図11には観客が身を乗り出して窓の外を眺める様子が描かれている。同興行は、日露戦争における旅順攻囲戦の諸場面を題材にしたもので、大変盛況であったという。次いで「海事工作館」（図12）は、門司の加藤日弘が、海事思想啓発目的で作った興行であり、「軍艦を轟沈」したところに、「潜水夫を入れ修繕の

工事」をさせ再び軍艦を浮かび上がらせるという仕掛けを施したものであった。図に写されたのは、「電気工作館の水雷艇」と題された軍艦の細工物である。同興行は、本妙寺下の橋にあった水車小屋の下手で行われたとされる。このほか、３月28日付の記事に、「厚賀友七氏の作　〇〇の模型」という見出しが付された写真があるが、当該記事が傷んでおり、模型の全体像は明らかにできない。しかし、記事の本文からは、同模型が、明治41（1908）年秋に制作され熊本陸軍幼年学校内で赤十字社熊本支部総会総裁閑院宮（かんいんのみや）殿下が見物した「熊本旧城」の模型であり、清正公300遠忌にもゆかりのある諸物品を販売する黒門下の店で展示されていたことがわかる。但し、同店の商品を購入した者にのみ無料で観覧できる券が配布されたというので、全ての人が模型を見れたわけではない。さらに同店の店頭には、「『藤公茶臼築城の際、白髪の老翁が公に歌を授与しつつある図』と『八陣記船場の図』を巧みに制作した生人形を掲げた」と記されてもいる。

300遠忌の見世物の特徴としては、「鉄線滑り」をはじめとする大規模な新しい興行物が加わった点が挙げられる。また、「観戦鉄道」や「海事工作館」といった軍事思想の啓発を目的とする興行物の登場も注目すべき点として挙げられる。総括すれば、従来の本妙寺における見世物よりも、数や種類が増え、娯楽の発展が見られたと言える。

3-4　本妙寺と見世物興行

以上、江戸から明治にかけての本妙寺の清正公遠忌における見世物興行を見てきた。250遠忌（安政６年）の見世物興行は、《本妙寺山景図》の描写内容と先行研究から、内容が把握できた22の見世物小屋のうち、「曲技」の小屋が12軒と全体の半数を占めていたことがわかった。また、この曲技のなかでも最も多かったのは、「芝居」や「人形芝居」、「ちんこ芝居」、「千両芝居」といった小屋で、５軒であった。次いで曲芸が３軒、軽業が２軒、座頭角力が１軒であった。続いて数が多かったのは「細工」類で７軒であった。「動物」と「人間」は、それぞれ２軒、１軒で、他のものに比べ数は少なかった。また、《本妙寺山景図》中の「内容不詳の見世物小屋」については、記録類から「足芸」、「蒸気船」、「牛娘」が興行された可能性を示唆することができたが、内容の把握にまで至らなかった。さらに、先行研究で既に明らかにされている生人形の見世物以外は、興行内容を全て把握することはできず、その内容はあくまで推測の域にとどまった。

明治期の本妙寺における見世物興行は、清正公275遠忌（明治18年）では、当時の新聞記事より、生人形や動物、操人形、機械人形、足藝、蒸氣車、身振新内が興行されたことが明らかにされ、25年前の250遠忌に興行された見世物とほとんど共通していたことがわかった。また、275遠忌の状況を報じる新聞記事には、見世物興行、とりわけ象の見世物が取り上げてられていたことから、人々の娯楽に対する関心が窺えた。続いて300遠忌（明治42年）についても、275遠忌と同様、新聞記事の閲覧、洗い出し作業を行い、大々的に営まれた300

遠忌では、数多くの新たな見世物が登場したことを明らかにすることができた。

数ある見世物の中でも生人形は、250遠忌、275遠忌、300遠忌の全てにおいて興行されたことと、それらが喜三郎や亀八、江島といった熊本出身の細工師によるものであったことが確認できた。生人形の見世物は、全国的に明治期に入ると衰退していくが、本妙寺では明治42（1909）年になっても興行されたという事実からは、熊本では生人形の人気がまだ続いていたことを示していると言える。その理由としては、各細工師の技量の高さはもちろんのこと、彼らが郷土出身者で、江戸や大阪などでも成功を収めたことなどが挙げられよう。

本妙寺における祭礼の盛り上がりを、池上尊義氏は、清正公信仰の全国的な広がりと、経済や商業活動の発展に関連付けて論じているが、日本では古くから寺社で見世物や芝居興行がしばしば行われたことに鑑みれば、今後は寺社という場所が持つ性質と見世物との関係についても考察する必要があるであろう。

おわりに

以上、第１章では、先行研究において見世物がどのように定義されているかを検証、分析し、本稿で述べる「見世物」の定義と範囲を明示した。また、日本における見世物の起源とその発展過程を、５期に分けて概観し、全体像の把握を試みた。

次に第２章では、九州の見世物興行に焦点を当て、それらの興行の様子や内容を概観して、可能な限り特徴を明らかにした。また、熊本県の見世物興行全体の様子を把握するため、見世物興行が行われた場所や、人気があった興行といった点から調査し、把握に努めた。

続いて第３章では、熊本市内の古刹本妙寺における見世物興行の視覚的史料といえる1859年の絵画史料に見られる見世物小屋や諸文献から、同寺の祭礼における見世物興行の演目や内容を明らかにすることを試みた。また、同寺の祭礼における見世物興行のその後の展開や変化を、新聞記事等の調査を通して跡付けた。

本稿執筆を通し、江戸時代や明治期の九州においても多様な見世物文化があったことを明らかにできたが、本妙寺の見世物興行については、未解明点も残った。また、江戸や大阪で人気を博した生人形師たちに関する資料は比較的豊富であるが、その他の見世物になると資料が僅少であるため、今後は、文献だけでなく肥後国時代の記録資料や、明治時代以降の新聞や行政史料などをもっと洗い出す必要があると言える。未解明点については今後の課題としたい。本稿が、九州及び熊本の見世物文化を理解する一助となれば幸いである。

［註］

⑴郡司正勝・関山和夫編『見世物雑志』　三一書房　1991年

⑵川添裕「見世物研究家列伝」（財団法人日本ナショナルトラスト編『自然と文化　59』1999年　64-65頁）参照。

⑶鵜飼正樹『見世物稼業―安田里美一代記―』新宿書房　2000年

⑷古河三樹『図説庶民芸能―江戸の見世物』

雄山閣出版　1982年　13頁参照。

⑸詳しくはわからないが、「甌」という字は甕（かめ）という意味があるため、甕を用いた芸のことか。

⑹履火と同義。火渡りの術。

⑺竿登りのことか。

⑻ぶらんこ。

⑼綱渡り。

⑽古河『前掲書』13頁参照。

⑾朝廷の音楽を司る役所。公的行事での雅楽の演奏や演奏者の養成を職務とする。

⑿古河『前掲書』16頁参照。

⒀郡司・関山編『前掲書』240頁参照。

⒁円筒形、または多角形の建物内部の壁面に写実的な風景の絵画や人形等が設置され、中央の観覧台からそれを眺める見世物。18世紀末にロンドンで始まった。

⒂現在の映画。明治から昭和初期まで「活動写真」と呼称された。

⒃いわゆる「レントゲン」。透視術の見世物。

⒄多くは女性が行う。蛇を首や両手に巻き付かせたり、口に出し入れするような芸。

⒅イギリス人記者のブラック（1827～80）は、明治５（1872）年、皇居近くの神田橋周辺の小屋にて、兎の死骸を食いちぎる少年の見世物を目にした。同年３月17日付の『日新真事誌』の論説では、「(中略）驚クベキ倫理ヲ乱セシ野蛮ノ風習アリ（中略)」と上記の見世物を批判した。この記事の３、４日後には、小屋掛けは一掃されたという。（倉田喜弘編『幕末明治見世物事典』吉川弘文館　2012年　４頁参照。）

⒆神社の祭礼（神幸祭）において神（一般には神体を乗せた神輿）が巡幸の途中で休憩または宿泊する場所、或いは神幸の目的地をさす。

⒇「見世物興行年表　元禄元年（1688）～元禄16年（1703）一」参照。

㉑岡崎鴻吉編『熊本御城下の町人　古町むかし話』日本談叢書　1952年　260頁参照。

㉒松本雅明監『日本歴史地理大系　熊本県の地名』平凡社　1985年　431頁参照。

㉓2-2-1②劇場については主に安田宗生『近代熊本の劇場、活動写真、及び大衆芸能』龍田民俗学会　2007年（１-34頁）を参照した。

㉔安田『前掲書』12-13頁参照。

㉕冨森盛一『生人形師　安本亀八』赤目出版会　1976年　17頁参照。

㉖『九州日日新聞』明治27年２月６日、４月19日参照。

㉗『同上』明治27年４月22日参照

㉘『同上』明治27年12月４日参照。

㉙『同上』明治29年１月31日、５月15日参照。

㉚撮影と映写の機能を持つ複合映写機。

㉛倉田『前掲書』49頁参照。

㉜キネトスコープを改良したもの。

㉝倉田『前掲書』50頁参照。

㉞安田『前掲書』36頁参照。

㉟『同上』36頁参照。

㊱伝統的な影絵と幻灯を組み合わせた奇術を得意とし、当時九州で絶大な人気を誇っていたが、経歴は不明。

㊲安田『前掲書』53-55頁参照。

㊳「電気館」という名称は、日本初の活動写真常設館である東京浅草の電気館にあやかったものである。そもそも電気という名称は、X線の実験や電気仕掛けの器具類を見せる見世物小屋であった「電友館」に由来している。しかし電友館の人気は長続きしなかったために、興行主は新たに活動写

真の興行をはじめた。名目が、国家のための電気の知識の啓発と普及であったため、館名は「電気」の名をとどめたのであった。

(39)現存している電気館には北海道名寄市の「第一電気館」と長野県上田市「うえだ電気館」がある。

(40)池上尊義「肥後本妙寺と清正公信仰」(清水憲二編『宗教と現代　19月号』)鎌倉新書1983年　12頁参照。

(41)桐箱の台に立てられた「蝶」と呼ばれる的に向かって扇を投げ、その扇・蝶・枕によって作られる形を源氏物語や百人一首になぞられた点式にそって採点し、その得点を競うゲーム。

(42)山門外に「ミセ物」の名目を４つ確認した。周囲に多数の小屋があり正確にどの場所を示しているのかは不明であるが、本稿では４軒と数えた。

(43)吉村豊雄『幕末武家の時代相―熊本藩郡代中村如斎日録抄―　上巻』清文堂出版2007年　221頁参照。

(44)清正に仇討ちを見破られ殺された横手五郎の御霊を祀った横手阿蘇神社による、横手五郎尊像の出開帳のことと思われる。《本妙寺山景図》画中右下に描かれる「横手大力神」がこれにあたる。

(45)吉村『前掲書』218頁参照。

(46)楊弓と投扇は、ゲームであるため見世物の分類に含まなかった。

(47)大木透『名匠　松本喜三郎』昭文堂書店1961年　147-156頁参照。

(48)池上「前掲論文」19頁参照。

(49)熊本市現代美術館『生人形と松本喜三郎』2004年　132頁参照。

表2-1. 筑前・筑後・福岡見世物興行記録

興行年	日付	興行地	興行内容	典拠	備考
文政９年（1826）	３月下旬	筑前国・筑後国	虎の子の見世物	磯野直秀『日本博物誌年表』	実際は虎ではなく、ツシマヤマネコと判明。
文政10年（1827）	？	筑前国	虎の子２匹の見世物	『甲子夜話』続編巻22／『柳庵随筆』／『舶来鳥獣図誌』	実際は虎ではなく、豹。肥後、長崎、加島でも興行。
明治６年（1873）	２月	福岡県　博覧会 太宰府境内	清国人の蛇踊り	『見世物関係資料コレクション目録』295・340頁	
明治17年（1884）	９月27日～29日	福岡県福岡市大工町の寄場	大蛇の見世物	『福岡日日新聞』1884・９・28	
明治18年（1885）	８月１日より25日間	福岡県博多教楽社	松本喜三郎「西国三十三所観音霊験記」	『福岡日日新聞』７・25、８・26、８・29	
明治23年（1890）	４月26日～５月４日	福岡県福岡市中洲永楽社	松旭斎天一の奇術	『福岡日日新聞』1890・4・27、４・29、５・２	
明治25年（1892）	３月18日～28日	福岡県福岡市中洲永楽舎	江川亀吉一座の玉乗り軽業	『福陵新報』1892・３・18	
〃	５月９日～	福岡県福岡市博多櫛田神社境内	大象と侏儒の手踊り	『福陵新報』1892・５・８	
〃	11月17日～12月４日	福岡県福岡市中洲永楽舎	松旭斎天一の奇術	『福陵新報』1892・11・13	
〃	12月～	福岡県久留米市	松旭斎天一の奇術	『九州日日新聞』1892・12・14	
明治27年（1894）	２月６日	福岡県博多櫛田神社	パノラマ館開館	『福岡日日新聞』1894・２・６	
明治29年（1896）	７月17日～	福岡県福岡市博多教楽社	松旭斎天一の奇術	『福岡日日新聞』1896・7・18	
明治30年（1897）	２月12日～	福岡県鞍手郡直片町寿座	松旭斎天一の奇術	『福陵新報』1897・2・13	
〃	３月５日～３月９日	福岡県小倉船頭町旭座	松旭斎天一の奇術	『福岡日日新聞』1897・３・６	
〃	７月	福岡県福岡市博多土居町安楽社	人牛の見世物	『福陵新報』1897・7・18	
〃	８月29日～９月26日	福岡県福岡市博多土居町安楽社	安本亀八の日清戦争の生人形	『福岡日日新聞』1897・８・25、９・10、９・16	
明治31年（1898）	１月22日～	福岡県久留米市縄手町掛舞台	三代目江川万吉一座の曲持軽業	『福岡日日新聞』1898・１・26	
〃	２月	福岡県福岡市博多櫛田神社境内	小松家一座の軽業	『福陵新報』1898・２・３	
明治34年（1901）	５月29日～	福岡県博多東中洲	日本チャリネサーカス一座の大曲馬	『九州日報』1901・５・30	
明治39年（1906）	12月～明治40年１月	福岡県直方町寿座	松旭斎天一の奇術		
明治41年（1908）	９月23日～	福岡県博多市寿座	松旭斎天一の奇術	『大阪毎日新聞』1908・９・22	
〃	10月31日～	福岡県小倉市常盤座	松旭斎天一の奇術	『大阪毎日新聞』1908・10・31	

明治43年 (1910)	３月	福岡市西中州、肥前堀の埋立地 第13回九州沖縄八県連合共進会余興場	益井商会興行部第一部の帝国体育競技大会／矢野本部巡回動物園	阿久根巌『サーカス誕生』36頁、152頁	
〃	春	福岡県福岡市東公園	ジオラマ館・パノラマ館開館	HP「新修　福岡市史」「東公園パノラマジオラマ館と画家　矢田一嘯」（2014・１・30発行『市史だより Fukuoka』第18号掲載）	
明治44年 (1911)	？	福岡	米人拳闘家アーワート・スミス氏、米人クレー氏、独人ハワト・ハウス氏と日本柔道家と試合	『東京朝日新聞』 1911・10・１ 『読売新聞』 1911・10・８	熊本、佐賀、鹿児島でも興行
明治45年 (1912)	４月19日～	福岡県博多寿座	津島満治の自転車曲乗り	『福岡日日新聞』 1912・４・21	
明治？年	？	福岡県博多中洲 永楽社	大日本撃剣大会	『見世物関係資料コレクション目録』93・323頁	

表2-2. 肥前見世物興行記録

興行年	日付	興行地	興行内容	典拠	備考
文政10年 (1827)	？	肥前国	虎の子２匹の見世物	『甲子夜話』続編巻22／『柳庵随筆』／『舶来鳥獣図誌』	実際は虎ではなく、豹。筑州、肥後、長崎、加島でも興行。

表2-3. 佐賀見世物興行記録

興行年	日付	興行地	興行内容	典拠	備考
文政10年 (1827)	？	加島(佐賀県鹿島市)	虎の子２匹の見世物	『甲子夜話』続編巻22／『柳庵随筆』／『舶来鳥獣図誌』	実際は虎ではなく、豹。
明治29年 (1896)	10月27日～	佐賀県佐賀市松原町 新馬場定席	松旭斎天一の奇術	『大阪毎日新聞』 1896・11・19	
明治44年 (1911)	？	佐賀	米人拳闘家アーワート・スミス氏、米人クレー氏、独人ハワト・ハウス氏と日本柔道家と試合	『東京朝日新聞』 1911・10・１ 『読売新聞』 1911・10・８	福岡、熊本、鹿児島でも巡業

表2-4. 長崎見世物興行記録

興行年	日付	興行地	興行内容	典拠	備考
天明７年 (1787)	１月	長崎	２匹の山嵐が舶来	『舶来鳥獣図誌』	翌年、幕府に献上される
寛政元年 (1789)		長崎	ヒクイドリが舶来	『見世物はおもしろい』24頁／『江戸の見世物』94頁	

享和３年 (1803)	10月８日	長崎	駱駝を載せた米船が長崎へ停船したが、貿易禁止だったため上陸できず	『見世物研究　姉妹編』67頁／『見世物研究』191頁	
文政４年 (1821)	７月	長崎	オランダより駱駝が船来	『長崎オランダ商館日記』九／『見世物研究』191頁	九州、四国、紀州、大阪、江戸、名古屋等を巡業。
天保期か (1830-44)	？	長崎	山嵐が船来	『見世物はおもしろい』24頁	
明治20年 (1887)	４月24～28日	長崎県長崎市 大浦居留地の空地	チャリネサーカスの曲馬	『鎮西日報』 1887・４・24～29	
明治23年 (1890)	３月29日	長崎県長崎市清洋亭	松旭斎天一の奇術		
〃	４月３日～ ４月５日	長崎県長崎市 大浦公会所	松旭斎天一の奇術		
〃	４月10日～ ４月18日	長崎県長崎市 八幡町劇場	松旭斎天一の奇術		
明治26年 (1893)	２月３日～ ２月20日	長崎県長崎市 栄ノ喜座	松旭斎天一の奇術		
明治29年 (1896)	６月２日～	長崎県長崎市 大浦公会堂	松旭斎天一の奇術		
〃	６月９日～	長崎県長崎市根津町 栄ノ喜座	松旭斎天一の奇術		
明治32年 (1899)	６月某日～ 25日	長崎県長崎市栄喜座	江川万吉一座の足芸軽業	『鎮西日報』 1899・６・18、６・25	
〃	７月29日～	長崎県長崎市 十善寺館内	江川万吉一座の足芸軽業	『鎮西日報』 1899・7・29	
明治39年 (1906)	10月８日～ 10月15日	長崎県長崎市八幡座	松旭斎天一の奇術	『鎮西日報』 1906・９・26	
明治41年 (1908)	９月９日～ ９月19日	長崎県長崎市八幡座	松旭斎天一の奇術	『鎮西日報』 1908・9・8	

表2-5. 豊後国府内藩・大分見世物興行記録

興行年	日付	興行地	興行内容	典拠	備考
元禄３年 (1690)	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	布袋大からくり人形、竜馬琴之助の軽業（籠抜）、女の力持ち、蜘舞など延べ人数22人	『府内藩記録』１／『日本庶民文化史料集成』第７巻、735頁	
元禄６年 (1693)	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	熊、獏、居合など	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、736頁	
元禄７年 (1694)	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	女の曲馬(22)、藤牧嘉真の居合抜(９)	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、736頁	
元禄11年 (1698)	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	片輪子など	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、737頁	

元禄14年（1701）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	市太郎の曲独楽と居合抜	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、738頁	
宝永元年（1704）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	放下、からくり独楽	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、739頁	
宝永２年（1705）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	女の力持ち	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、740頁	
宝永３年（1706）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	曲手鞠	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、741頁	
享保７年（1722）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	大坂権七座の馬芝居／曾我大坂長町権太夫のぞき見世物（６）／筑後久留米の小鷹伝七・小鷹林之助一座の軽業芝居	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、746頁	
享保13年（1728）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	富沢一長の軽業／大坂生玉万歳芝居／天満善兵衛ののぞき芝居	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、747頁	
享保14年（1729）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	軽業・曲枕・布晒し／千本築からくり／あまや庄兵衛の水からくり	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、749、750頁	
享保15年（1730）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	十界図／居合抜／大坂・幸衛門夫妻の作人形／三升屋千十郎・難波助十郎ほかのこま芝居／大坂・武兵衛の曲枕／大坂・松太郎の軽業	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、751、752頁	
享保18年（1733）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	こま、曲枕（14）豊前中津太夫早川小十郎、座本浅田彦四郎。早川小十郎の曲独楽／藤田源之助の手妻／大坂道頓堀権七、宇兵衛の紙細工	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、755頁	カッコ内は興行人数
元文元年（1736）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	きりん市太夫一座／花村常五郎の曲手まり芝居	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、756頁	
元文２年（1737）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	都いつみの軽業芝居／大幡楊心の居合抜／前田庄之助、早雲喜八の人馬曲力持／花野さんやの蛇女	『府内藩記録』／『日本庶民文化史料集成』第７巻、758頁	
寛保２年（1742）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	軽業（11）座本泉屋喜兵衛／からくり（５）大坂道頓堀／手つま人形（12）道頓堀／水からくり（３）道頓堀	神田由築『近世の芸能興行と地域社会』東京大学出版、1999年、110頁	カッコ内は興行人数

安永元年（1772）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	人魚（２）／両頭の蛇／三本足の猫の見世物	神田、同上、111・115頁	カッコ内は興行人数
安永８年（1779）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	軽業芝居・江戸御香具所座本山田小六	神田、同上、111頁	
文化４年（1807）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	大坂軽業・玉本小糸（20）／大坂軽業・早川虎市（29）／唐国鳥（２）伊予／唐国鳥（２）筑後	神田、同上、111・336頁／『日本庶民文化史料集成』第６巻、936頁	カッコ内は興行人数
文政４年（1821）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	軽業・座本大坂玉本林之助（16）／孔雀・火いんこ・せいかいいんこ・ひくう鳥（２）熊本／やぎ（１）長崎	神田、同上、112・336頁	カッコ内は興行人数
天保元年（1830）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	山鹿燈籠（３）／一本足娘（２）	神田、同上、112頁	カッコ内は興行人数
天保13年（1842）	８月	豊後国府内藩（大分県大分市）浜之市	鷲・雉子・朝鮮鷲・朝鮮鳩（１）大坂／水からくり（３）江戸・京／両頭亀（１）長崎	神田、同上、112頁	カッコ内は興行人数
明治21年（1888）	２月１日	大分県速見郡	見世物の猪が逃げ出す。	『豊州新報』1888・２・６	

表2-6. 薩摩・鹿児島見世物興行記録

興行年	日付	興行地	興行内容	典拠	備考
安永元年（1772）	？	薩摩国	オランダ人によって山嵐が持ち込まれる	『動物物語』20頁 『見世物研究』182、199頁	同年８月に島津重豪から田沼意次へ贈られた。
明治15年（1882）	４月１日より	鹿児島県鹿児島市松原町松原神社内	江川万吉の軽業	『鹿児島新聞』1882・４・５	
〃	４月	鹿児島県広口（大口市か）	松本喜三郎の生人形「堂鷹」	『鹿児島新聞」1882・４・13	
明治44年（1911）	？	鹿児島	米人拳闘家アーワート、スミス氏、同クレー氏、独人ハワトハウス氏と日本柔道家との競技会	『東京朝日新聞』1911・10・1 『読売新聞』1911・10・８	福岡、熊本、佐賀でも興行

表2-7. 肥後・熊本見世物興行記録

※興行地は当時のものである。わかっているものには、（　）内に現在の地名を記した。
※本妙寺で行われた見世物興行のうち、清正公遠忌の見世物興行は★印を付した。

興行年	日付	興行地	興行内容	典拠	備考
享保９年（1724）	４月９日	飽田郡春日村（熊本市）長谷寺	女相撲	『新熊本市史通史編第４巻近世Ⅱ』1001頁	
文化７年（1810）	７月８日～８月中旬まで	尾跡村（熊本市西区河内町大字船津）	菊池操座による操人形芝居	『新熊本市史通史編第４巻近世Ⅱ』525頁	菊池操座は８月中旬まで逗留した。

〃	８月下旬	下河原 上座	太夫筑紫水太夫による操人形芝居	『新熊本市史通史編第４巻近世Ⅱ』525頁	
文化13年 (1816)	４月１日～	尾跡村津波祭り	近津操座による操人形芝居	『新熊本市史通史編第４巻近世Ⅱ』525頁	
文化14年 (1817)	春	熊本市西区花園 本妙寺・題目堂	黄金仏の開帳／天草柳嘉蔵座の操人形芝居／越後獅子／物真似／手鞠	『新熊本市史通史編第４巻近世Ⅱ』525・527頁	
文政10年 (1827)	１月29日	尾跡村	操人形芝居	『新熊本市史通史編第４巻近世Ⅱ』526頁	
〃	８月	尾跡村	操人形芝居	『新熊本市史通史編第４巻近世Ⅱ』526頁	昼と夜に興行された。
〃	？	不明	虎の子２匹の見世物	『甲子夜話』続編巻22／『柳庵随筆』／『舶来鳥獣図誌』	実際は虎ではなく、豹。
文政11年 (1828)	３月	古町（熊本市五福校区あたり）	俄踊り	『新熊本市史通史編第４巻近世Ⅱ』527頁	石塘築直しが行われた際
文政12年 (1829)	８月１日～	河内村・船津村（熊本市西区の一部）	操人形芝居	『新熊本市史通史編第４巻近世Ⅱ』526頁	
天保２年 (1831)	３月	本妙寺開山忌	見世物が出たが詳細は不明	『新熊本市史通史編第４巻近世Ⅱ』526頁	
天保10年 (1839)	２月	尾跡村	操人形芝居	『新熊本市史通史編第４編近世Ⅱ』526頁	
〃	？	尾跡村 魚祭り	東新宅石割砲の女中による俄踊り	『新熊本市史通史編第４編近世Ⅱ』527頁	
天保12年 (1841)	４月６日～15日	下河原	芝居／忠臣蔵十二段のをきあけ（押絵細工）／佐太郎の物真似	『熊本御城下の町人』260頁	
天保13年 (1842)	３月	野出村神社年季祭（熊本市西区河内町野出）	岩戸山開帳／阿波上村座吉田三吾の操人形芝居	『新熊本市史通史編第４編近世Ⅱ』526頁	
天保15年 (1844) 弘化元年	３月	本妙寺	孔雀／はらみ女／山がらの芸／芝居	『熊本御城下の町人』262頁	
嘉永２年 (1849)	２月下旬	小田手永小天村天子宮125年祭（玉名市）	天草鬼池操座による操人形芝居	『新熊本市史通史編第４編近世Ⅱ』526頁	
嘉永５年 (1852)	？	尾跡村	天草鬼池操座による操人形芝居	『新熊本市史通史編第４編近世Ⅱ』526頁	
嘉永６年 (1853)	３月	尾跡村	近津操座による操人形芝居	『新熊本市史通史編第４編近世Ⅱ』526頁	
嘉永７年 (1854)	４月下旬	尾跡村	近津操座による操人形芝居	『新熊本市史通史編第４編近世Ⅱ』526頁	
★ 安政６年 (1859)	２月20日～ ３月29日	本妙寺 清正公250遠忌	安本亀八の大布袋と四十八癖の生人形ほか	吉村豊雄『幕末武家の時代相上巻』218頁／ 大木透『松本喜三郎』67-68頁	法要は２月18日から29日まで
文久２年 (1862)	３月中旬	熊本市中央区古京町	俄踊り	『新熊本市史通史編第４編近世Ⅱ』527頁	御殿の成就で行われた
〃	５月中旬	尾跡村	近津操座による操人形芝居	『新熊本市史通史編第４編近世Ⅱ』526頁	

慶応３年（1867）	５月１日～	尾跡村	近津操座による操人形芝居	『新熊本市史通史編第４編近世Ⅱ』526頁	
明治12年（1879）	９月29日～	下河原	山鹿の燈籠師による紙細工	『山鹿市史』318頁	
明治15年（1882）	３月上旬より60日間	下河原	松本喜三郎「西国三十三所観世音霊験記」の生人形	大木、同上、130-134頁	
明治16年（1883）	？	下河原	松本喜三郎「本朝孝子伝」の生人形	冨森盛一『生人形師　安本亀八』135頁	
★明治18年（1885）	４月中旬～	本妙寺 清正公275遠忌	象／松本喜三郎「清正公御一代記」「本朝孝子伝」の生人形ほか	『紫溟新報』1885・４・３／『熊本新聞』1885・４・15、４・18～24、５・20	法要は４月15日から５月17日まで
〃	５月20日～	熊本市中央区新町２丁目明十橋	松本喜三郎の生人形「本朝孝子伝」	大木、同上、151頁 『紫溟新報』 1885・５・12、５・17	
明治19年（1886）	６月６日～	本庄村(熊本市本荘)	江川藤吉の足芸	『熊本新聞』 1886・６・６	
〃	８月31日	警察署撃劇道場	撃剣試合	『紫溟新報』 1886・８・31	
〃	？	新３丁目広場	大山猫の見世物	『世相くまもと 明治・大正編』67頁	
明治20年（1887）	５月初旬	洗場町２丁目（熊本市中央区船場町）	宮本治平の生人形「神仏霊験記」	『熊本新聞』 1887・７・１	
〃	８月	明十橋	自転車の張鉄渡り	『紫溟新報』 1887・８・11	
〃	10月24日～	明十橋	吉村一女の地球玉興行	『熊本新聞』 1887・10・26	
〃	11月８日～	川端町定席	地球玉興行	『熊本新聞』 1887・11・11	
〃	？	明十橋	江島栄次郎「幼学忠孝鑑」の生人形	冨森盛一『生人形師　安本亀八』136頁	
明治21年（1888）	１月	第百五十一銀行前	女足芸等	『熊本新聞』 1888・１・12	琴平社の縁日
〃	９月～	新３丁目朝市場	七福神七化けの興行	『紫溟新報』 1888・９・１	
〃	９月22日～ 10月２日	末広座	西洋手品	『紫溟新報』1888・９・22／『熊本新聞』1888・９・25、９・28、10・２	
明治22年（1889）	４月13日～	山鹿郡来民町（鹿本郡） 大光寺	城北医会解説に際して幻灯会を催す	『九州日日新聞』 1889・４・18	
〃	５月８日	仮祠の側（？）	江川藤吉の足芸／大女／鼓弓	『熊本新聞』 1889・５・８	
明治23年（1890）	１月～ ２月２日	末広座	帰天斎正玉の西洋手品	『九州日日新聞』1890・１・24、２・４／『熊本新聞』1890・１・25	
〃	５月３日～	下河原	地球儀及び万国人種人形	『九州日日新聞』 1890・４・30	

〃	10月20日～ 12月３日	明十橋 第百五十一銀行前	江島栄次郎「幼学忠孝鑑」の生人形	『熊本新聞』1890・10・９、10・14、10・21、10・24、10・28、11・18、11・28、11・30	
明治24年 (1891)	２月７・８日	熊本市中央区北千反畑町	鳥獣／首長手踊り	『熊本新聞』 1891・１・24	
〃	２月22日～ ３月11日	末広座	ジャグラー操一の手品	『九州自由新聞』 1891・２・22、『熊本新聞』1891・３・12	
明治25年 (1892)	３月	熊本市西区二本木町	江川藤吉一座の足芸軽業	『九州日日新聞』 1892・３・13	
〃	５月４日～ ６月11日	明十橋 第百五十一銀行前	厚賀友七の生人形	『熊本新聞』1892・４・21、４・26、５・４、５・17、５・18、５・21／『九州日日新聞』1892・６・９	
〃	５月26日～	末広座	松本喜三郎「本朝孝子伝」「西国三十三所観世音霊験記」の生人形	『熊本新聞』1892・5・24／『九州日日新聞』1892・６・１／冨森盛一『生人形師　安本亀八』136頁	
〃	７月10日～ ８月20日	末広座	江川亀吉一座の玉乗り興行	『九州日日新聞』1892・７・８、７・14、７・26、８・17	
〃	11月５日	明十橋	東京の村越滄州の鰻細工生人形	『熊本新聞』 1892・11・５	
明治26年 (1893)	１月12日～ 22日	東雲座	松旭斎天一の奇術	倉田喜弘『明治の演芸』	
明治27年 (1894)	４月22日	下追廻田畑町（熊本市中央区紺屋今町）山崎練兵場東側	九州パノラマ館開館	『九州日日新聞』1894・１・12、３・16、４・22、４・24、５・５、６・５、６・21／『熊本新聞』1894・４・19／『読売新聞』1894・４・28	
〃	５月29日	洗馬都亭の隣	西洋奇術七変化	『九州日日新聞』 1894・5・29	
明治28年 (1895)	４月８日～ 10日	玉名郡玉水村	京都及び東京の幻灯師による釈迦一代記、親鸞一代記、蓮如聖人、顕如聖人一代記、日清戦争牙山平壌の激戦旅順口威海衛の攻撃の幻灯	『九州日日新聞』 1895・４・９	
〃	４月22日～ 26日	浄行寺町 養徳寺	幻灯会	『九州日日新聞』 1895・４・24	
〃	10月11日～	洗場町１丁目	厚賀友七「清国風俗生人形」	『九州日日新聞』 1895・９・19、10・12	
明治29年 (1896)	１月31日～ ２月22日	東雲座	松旭斎天一の奇術	『九州日日新聞』1896・１・22、２・３、２・７、２・21	
〃	２月～	末広座	美人の手踊り	『九州日日新聞』 1896・２・５	

〃	３月～	八代町（八代市）	松旭斎天一の奇術	『九州日日新聞』1896・３・７	
〃	３月～	水俣市 衆楽館	松旭斎天一の奇術	『九州日日新聞』1896・３・７	
〃	５月?	熊本市中央区練兵町	日清戦争のパノラマ館開館	『九州日日新聞』1896・５・15、５・19	５月19日の段階ではまだパノラマ画が到着しておらず、続報も確認できていないため実際の開館日が不明。
明治30年（1897）	３月29日～ ５月25日	下河原	安本亀八「日清戦争実説」の生人形	『九州日日新聞』1897・３・３、３・24、３・27、３・30、４・２、４・６、４・13、５・21／『九州自由新聞』５・22	『九州日日～』の３月27日の記事だけ厚賀友七の名前になっている。
〃	４月～ ４月17日	本妙寺	足芸／西洋軽業	『九州自由新聞』1897・４・11、４・15／『九州日日新聞』４・14、４・15	足芸と軽業はこの後、下河原で興行された
〃	４月15日～	下河原	足芸	『九州自由新聞』1897・４・11、４・15	
〃	４月21日～ ５月	下河原	西洋軽業	『九州日日新聞』1897・４・14、４・21、４・29／『九州自由新聞』５・21	
〃	６月４日～	末広座	玉川花遊一座の奇術・幻灯	『九州日日新聞』1897・６・３、６・10、６・29	
〃	６月12日～	安巳橋	日本一座の西洋曲馬	『九州日日新聞』1897・６・９	
〃	９月19日～	東雲座	活動写真	『九州日日新聞』1897・９・21、９・25	
明治31年（1898）	３月６日～	下河原	松本喜三郎「本朝孝子伝」の生人形	『九州日日新聞』1898・３・３、３・６、３・10、３・31、４・３、４・８	
〃	４月１日～	下河原	松本喜三郎「三十三所観世霊験記」の生人形	『九州日日新聞』３・31、４・３、４・８	
〃	５月	山崎練兵場の追廻田畑の街路	軽業／手品／動物その他	『九州日日新聞』1898・５・７	
〃	６月１日～	末広座	玉川花遊一座の奇術・幻灯・活動写真	『九州日日新聞』1898・５・31、６・４、６・14	
〃	９月13日～	末広座	高知の人による電気仕掛けの生人形	『九州日日新聞』1898・９・14	
明治32年（1899）	５月５日～	下河原公園	齊藤喜三郎「加藤清正霊験一代記」の生人形	『九州日日新聞』1899・５・９	
〃	７月21日～	下河原公園	石像十二変化の見世物	『九州日日新聞』1899・７・22	
〃	10月28日	共楽座	神経夢大幻灯	『九州日日新聞』1899・10・27	
〃	11月21日～	人吉町（人吉市）	松旭斎天一の奇術		

明治33年 (1900)	２月24日～	浄行寺町 招楽座跡	西洋手品	『九州日日新聞』 1890・２・25	
〃	３月～	下河原公園	安本亀八「大日本開闢由来」生人形	『九州日日新聞』 1890・３・10、４・22	
明治34年 (1901)	２月４日～ 12日	末広座	玉川花遊一座の奇術・幻灯・活動写真	『九州日日新聞』1901・１・30、２・２、２・５、２・10、２・14	
〃	２月20日～	坪井米屋町（上通） 勧楽場裏手	玉川花遊一座の奇術・幻灯・活動写真	『九州日日新聞』 1901・２・22	
〃	７月10日～	敷島座	北清戦争及び西米英杜戦争の活動写真	『九州日日新聞』 1901・7・10	
明治35年 (1902)	５月20日	下河原公園蜃気園	江川藤吉一座の軽業	『九州日日新聞』 1902・5・17	
〃	７月11日	下河原公園喜楽座	犬相撲	『九州日日新聞』 1902・７・11	
〃	11月21日～	下河原公園蜃気園	生人形	『九州日日新聞』 1902・11・21	
明治36年 (1903)	２月５日～ ９日	旭座	活動写真	『九州日日新聞』 1903・２・６	
〃	７月24日～	下河原公園喜楽座	山伏の力興行（臼かぶり火渉り湯かぶり等）	『九州日日新聞』 1903・７・25	
〃	９月２日～	東雲座	松旭斎天一の奇術	『九州日日新聞』 1903・９・２	
〃	11月～	下河原公園喜楽座	菊細工相撲人形	『九州日日新聞』 1903・11・18	
明治38年 (1905)	２月５日～	東雲座	ジャグラー操一の西洋奇術	『九州日日新聞』 1905・２・３	
〃	６月14日 （16日？）	新市街	日露戦争のパノラマ館開館	『九州日日新聞』 1908・６・14、６・18	18日の記事に「一昨日より開館」とあるため、正確な開館日は不明
明治39年 (1906)	８月18日～	敷島座	石井ブラックの奇術	『九州日日新聞』 1906・８・19、８・28	
〃	11月21日～	人吉町（人吉市）	松旭斎天一の奇術	『九州日日新聞』 1906・11・20	
明治41年 (1908)	１月１日～	下河原公園	安本亀八の生人形／機械仕掛けの象／福助の手踊り等	『九州日日新聞』 1908・12・29	
★ 明治42年 (1909)	３月19日～	本妙寺 清正公遠忌300遠忌	松本喜三郎「本朝孝子伝」の生人形	『九州日日新聞』 1909・３・19、３・26	
明治43年 (1910)	７月12日～	相生座	玉川花遊一座の幻灯・活動写真	『福岡日日新聞』 1910・７・12	
明治44年 (1911)	８月２日～	東雲座	松旭斎天一の奇術	『福岡日日新聞』 1911・７・28	
〃	？	不明	米人拳闘家アーワート、スミス氏、同クレー氏、独人ハワトハウス氏と日本柔道家との競技会	『東京朝日新聞』 1911・10・１ 『読売新聞』 1911・10・８	

図１．梶山九江《本妙寺山景図》
紙本著色　掛幅装　53.9×106.4cm
安政６（1859）年　本妙寺

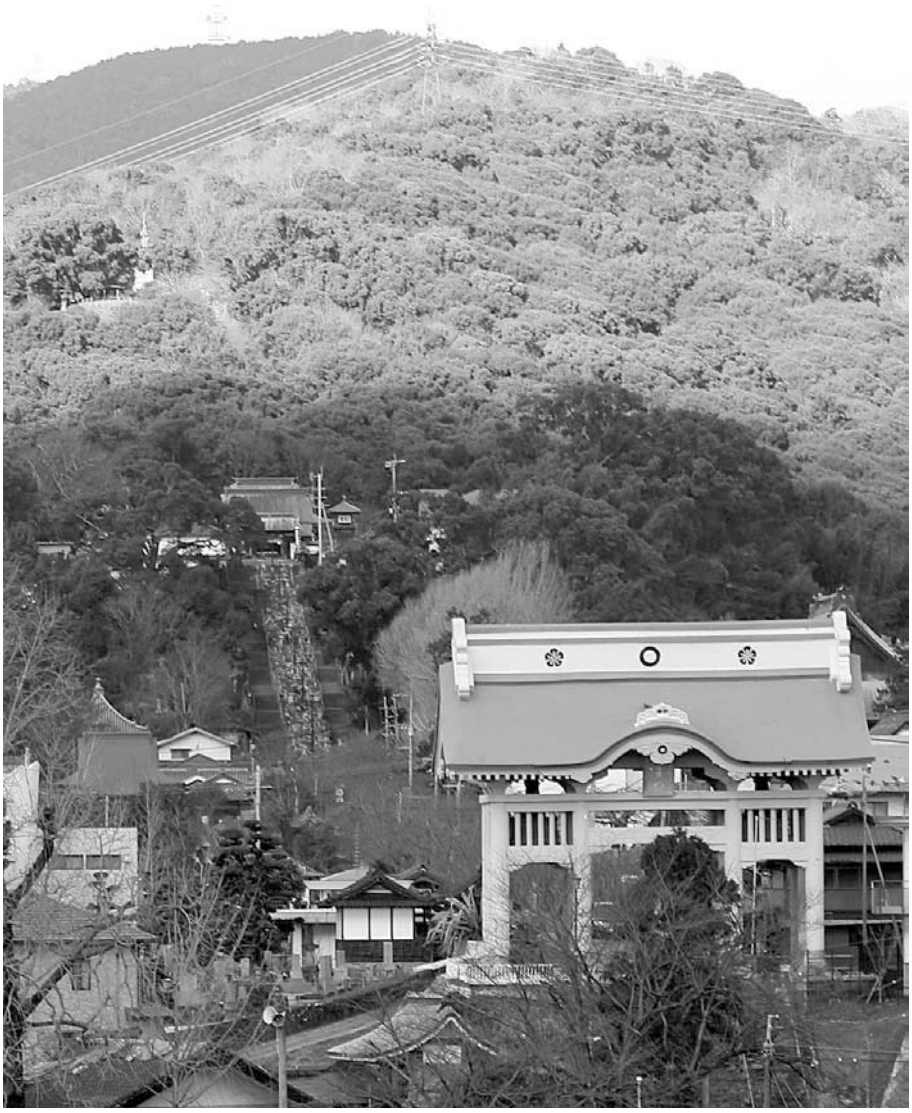

図２．仁王門と胸突雁木

図３．「加藤清正公銅像」

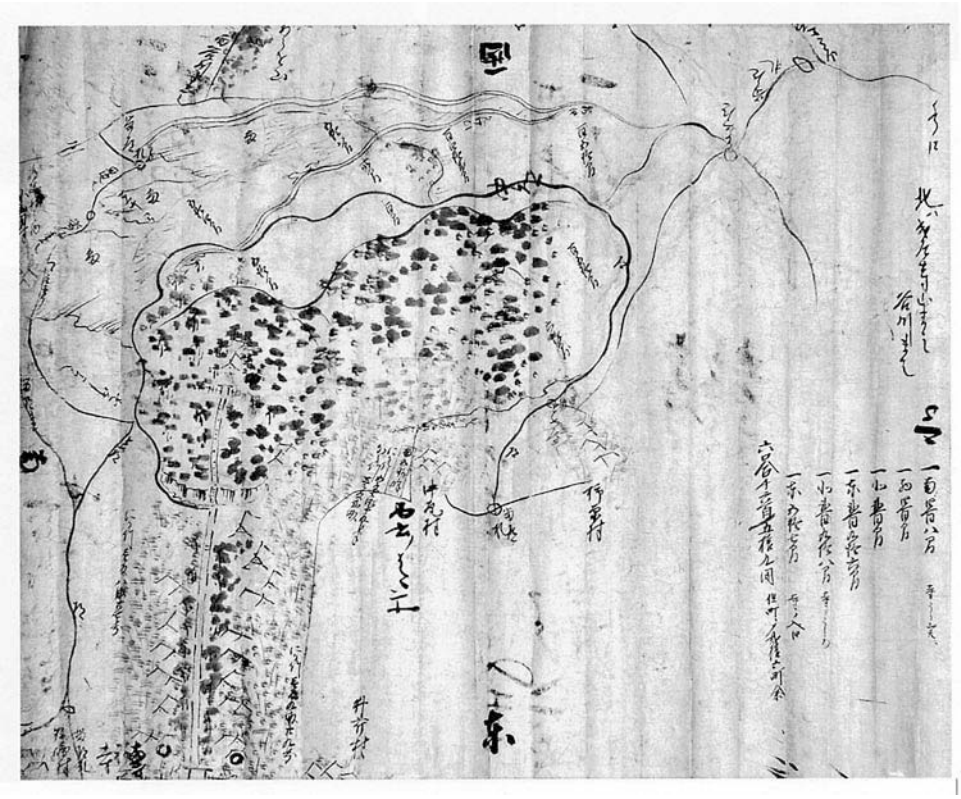

図４．《本妙寺領内絵図》
紙本墨書・掛幅装
寛永９（1632）年頃　本妙寺

図５．《肥後熊本本妙寺真景全図》

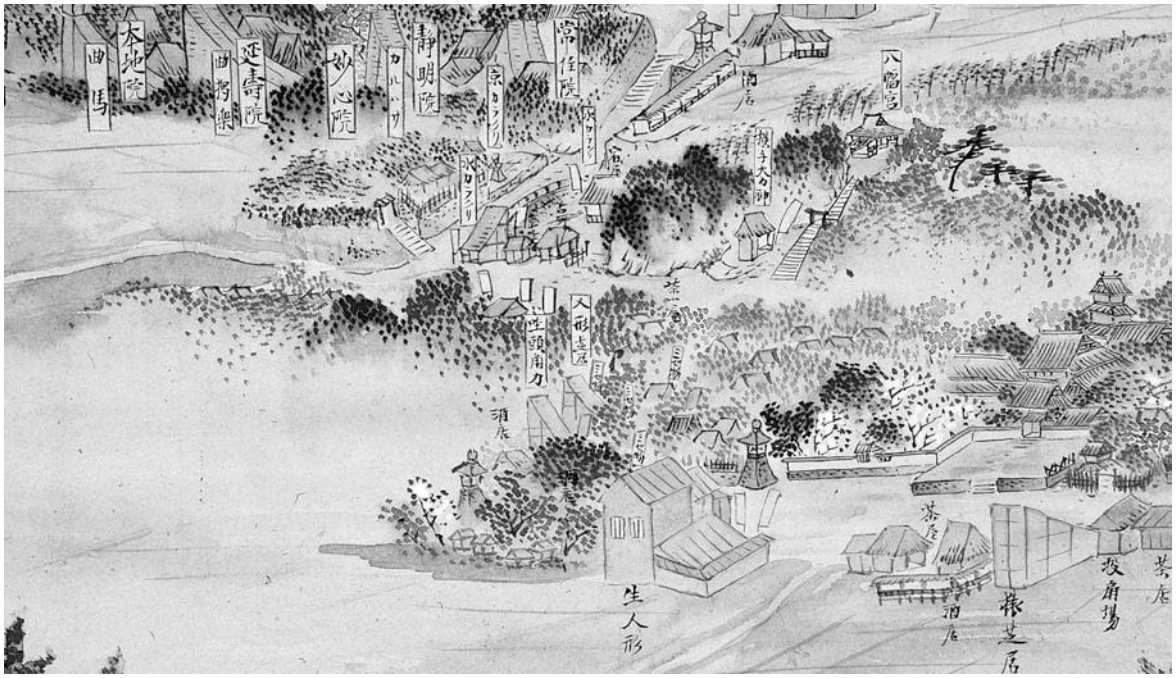

図６．梶山九江《本妙寺山景図》部分

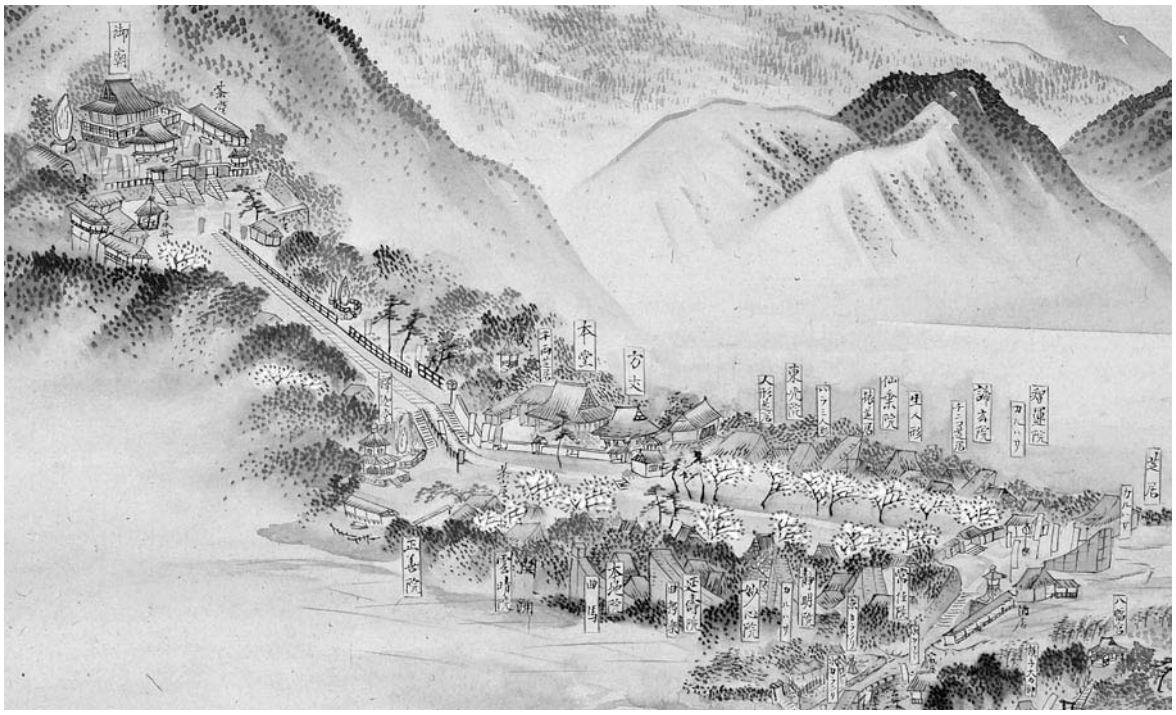

図７．梶山九江《本妙寺山景図》部分

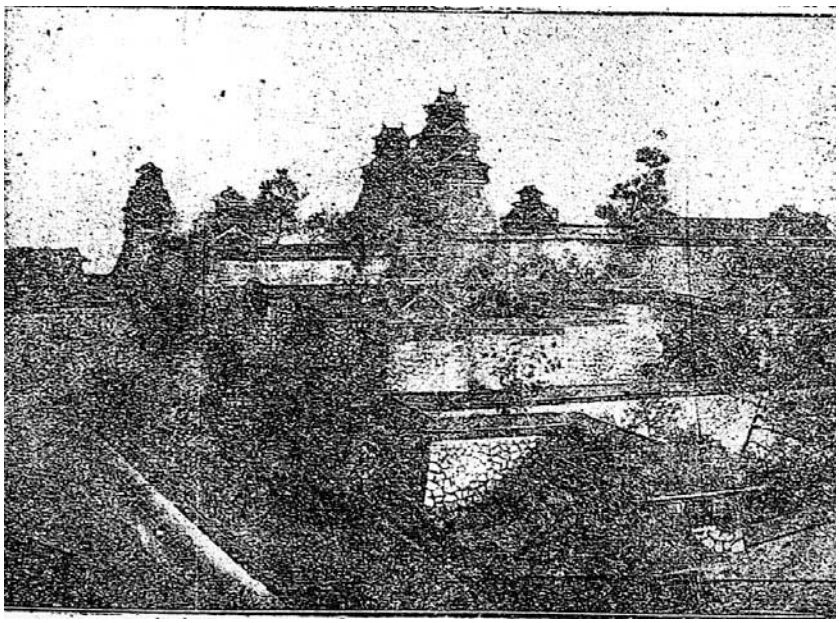

図８．『九州日日新聞』明治42年４月２日掲載　「熊本城模型」写真

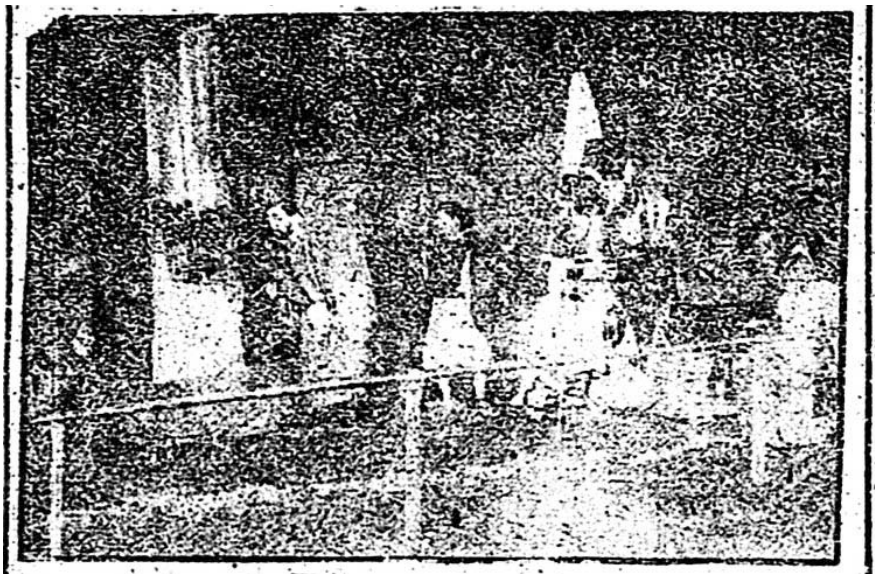

図９．『九州日日新聞』明治42年４月６日掲載　「本朝孝子伝」写真

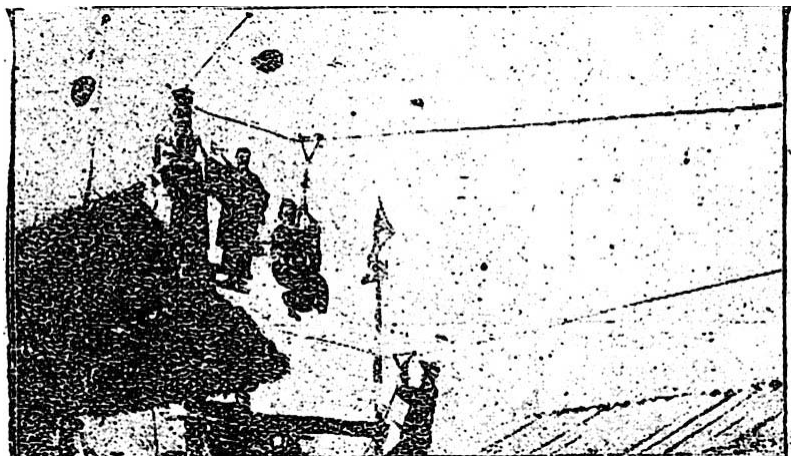

図10. 『九州日日新聞』明治42年４月６日掲載 「鉄線滑り」写真

図11. 『九州日日新聞』明治42年３月19日掲載 「観戦鉄道」挿絵

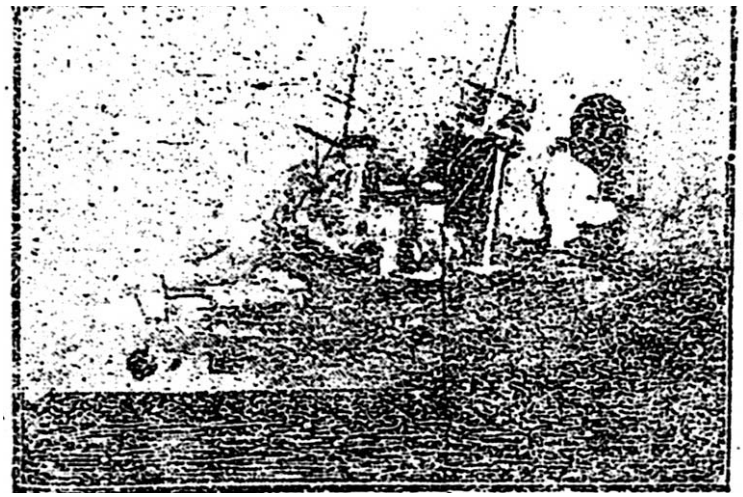

図12. 『九州日日新聞』明治42年４月３日掲載「海事工作館」写真